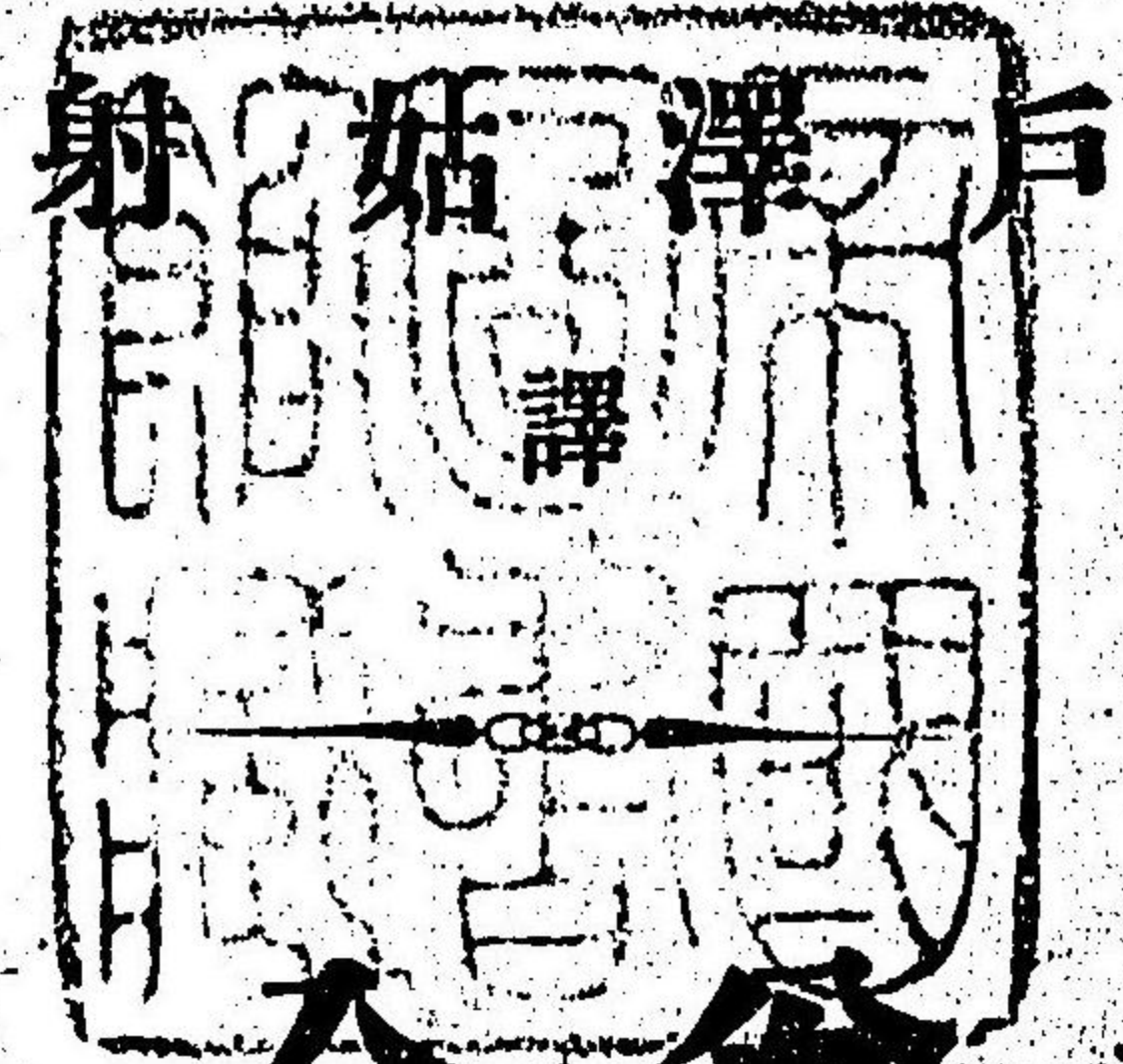


78-69

文 學 士



# 沙翁全集

第 四 卷

才 七 口

發 兌

大 日 本 圖 書 株 式 會 社

明 治 三 十 九 年 初 版



## 序

譯者今より七八年前、雜誌太陽の文藝欄に、本篇の譯稿を寄せしことあり、今に到りて一見すれば疎漏杜撰殆んど誦するに堪はず、我ながら當時の大胆に驚かざるを得ざる程なるが、今復び本譯を公にするに當りては、改竄校訂殆んど完膚なしと云はむよりは、寧ろ新たに譯出したるといふを以て、適當と思ふに至れり、然れども譯者は、尙ほ此稿を以て自ら満足すべき程度に達したるものとは思惟せず、否な數年の後鉛版を更ふるの時機來らば、更に改竄校訂殆んど完膚なからしめ、以て數年前の大胆に驚

くこと、又今日の如きことあらむを恐る  
序ながら、沙翁全集第一巻發刊以來、雜誌に新聞紙に、大方の識  
者より、幾多獎勵の辭と、眞摯なる訓諭とを辱うするを得たるは  
感佩に堪へず、譯者は、永く服膺して、大に反省する所あらむこと  
を期する者也

明治三十九年三月

譯者

### オセロの悲劇解説

刊行の年月

此脚本の初めて刊行せられたるは、千六百二十二年にして第一クォ  
ーター版是也、然れども此第一版は、種々の點に於て不完全なる所多かりしが、  
其翌二十三年に出でたる、第一クォーター版(初めて出た)に至り、初めて略  
ぼ完全のものを得たりと稱せらる、其後千六百三十年に出でたる第二ク  
ォーター版は、此第一クォーター版に依て訂正せられたるもの、如しといふ、  
第三以下のクォーター版は、皆其第二クォーター版の翻刻に過ぎずとぞ、され  
ば、オセロの場合に於ては、クォーター版よりも、クォーター版を以て正しき稿  
本となすが如し

## 脱稿の年月

脱稿の年月、即ち此脚本が初めて舞臺に上せられたる年月に關しては、古來幾多の議論ありて、分明ならずと雖も、マローンの千六百〇四年説を以て、略ぼ當を得たりと考ふる學者多きが如し、若し此説にして誤りなくんば、此篇の出でたるは、ハムレットより後ること二年、キングリアに先だつこと二年、又マクベスに先だつこと二年、沙翁が四十一歳の時に、して彼が劇才、今や其頂上に達したる頃の作といふを得べし、宜なり、オセロを以て、沙翁が悲劇中の最大傑作なりと稱するの評家あることや。

## 材料の出處

伊太利人テラルデ、シンシオが百物語中の一を材料として脚色したるものなり、此物語は千五百六十五年、シ、リー島の一市にて、初めて發見せ

られたるものなれど、沙翁は原書に依て之を讀みしか、將た譯書に依りしかは不明なるが、英譯書は、沙翁の生存中、一も出でたるものなかりしといふ、尤も佛譯及び西班牙譯は、オセロ以前既に存在したるが如し。但しシンシオが物語たるや、甚だ簡單疎漏にして、人名の如きも、唯一のデスデモナなる名を擧ぐるのみ、其他の人物は皆な無名にして、たゞムールと呼び、副官と呼び、旗手と呼ぶのみ、各人特殊の性格の如きは、沙翁の手を経て、初めて、まかく顯著なるを得たるや、いふ迄もなし、大悲劇發展の動機、順序、さては、様々に變化する人情の機微を描ける等の事、皆亦沙翁獨特の手腕と知るべし。

物語の荒筋に於ては、大抵原作に従ひたれども、其始と終とに於て少しく異なる所あり、殊に終に於て原作にては、デスデモナを殺せしは、イア

ゴーにして、オセロにあらず、オセロは只だ傍觀せしのみ又殺害の方法は、靴下の中に砂礫を盛りたるものにて毆打し、遂に死に至らしめ、天井の一部を其上に墜落せしめ、之が爲め死したるやうに粧ひ、之にて一時はまんと人目を欺き了せしが、オセロは愛妻を失ひし心の苦痛に責められて、半ば狂氣の狀に陥り、イアゴーを憎むこと甚だしきに至り、遂にイアゴーの官職をさへ奪ひしかば、イアゴー怒つてカッシオの許に奔り、巨細の事實を懺悔するによりて、遂に大破綻を生ずるやうに出來居れるなど、是れ沙翁の脚本に異なる所なり、又ロ德里ゴーなる人物は、全く沙翁の創意に出でたり、左に沙翁が脚本即ち本篇の梗概を記述し、本文を讀まむとする者の爲めに、豫め結構の大体を知るの架となさむ

梗概

(第一幕)

第一場 伊太利の獨立市なる、エニス市の街頭、夜既に關けて深更に垂んとしたる光景の中、同市の若紳士ロ德里ゴーなる者と、同市の雇武官、ムール人(亞非利加)オセロが旗手(旗手は副官の次位)イアゴーなる惡漢との對話にて幕明く、ロ德里ゴーは、兼て元老院議官、アラバンシオの一人、女デスデモナの姿色に迷ひ、何時かは手に入れ我が本望を達せむと欲すれ共、頑固一徹のアラバンシオは、斷然彼が申込を退け、容易に承引すべくもあらぬを見て、其周旋をイアゴーに依頼し、其報酬として多額の金錢をイアゴーの乞ふが儘に與へ、以て徐ろに機のを待ちしが、豈に圖らむや、デスデモナは今夜父の家を奔り、密かに云替したる黒人オセロと結婚の式を挙げむとは、かくと聞き、落膽と憤怒とに焦ち立つたるロ德里ゴー、端なく

今しもイアゴーに出遇ひたるを幸ひと、日頃の頼みを反故となし、むざむざ彼女を他人の奪ひ去るに任せたるイアゴーの不實を責め、且つ日來はオセロを憎み居るやうに云ひなせしが、今夜彼が彼女を連れ出せしを幫助、少くとも黙認せしを見れば、彼が下役を勤むるだけに、オセロを無二の主君と頼み居るなるべしと恨むに、イアゴーは辯解して曰ふ、否々今夜の事全く予は聞知せざりしなり、又オセロを憎むの念は嘗て語りし通りなり、予は彼が副官たらむと欲し、然るべき人を以て申込ましめたるに、予が願を容れず、彼の無能のカッシオを登用して副官となし、予は漸く旗手たるを得たるのみなる恨めしさ、表面こそ無二の主君とも冊カッけそは、彼をカッ踏臺として世に立たむが爲め、彼に事ふるは、即ち自身に事ふる爲め、要するに、予を以て見懸通りの男となす勿れと説くに、ロ德里ゴー然らば差當り

如何にせば宜からむといふに、今より直ちにデスデモナの父ブラバンシオの館を音づれ、此由を告げ知らせ、彼を煽動してオセロ新夫婦が歡樂を妨害せしめむと勸む、乃ち二人相携へて、ブラバンシオが館の前に至り、大聲を發して彼が眠を覺まし、女メが出奔の趣を告ぐ、ブラバンシオ初めは之を信ぜず、大に怒りしが、遂に其事實なるを知り、家の子郎等を促し立て、ロ德里ゴーを案内として、オセロが行衛を搜索せんとして出立つ、此間にイアゴーは、オセロが宿へ赴き、何喰はぬ顔して居たりけり

第二場 同じく他の街頭、オセロが宿所の前にて、オセロとイアゴーと談話をなし居る所へ、松明振照して進み來る若干の人数あり、イアゴーは之を見て、これをブラバンシオが、女の行衛を尋ぬる追手ならむと云ひ居る中、やがて近づくを見れば、こは思ひも寄らず、カッシオ并に他の役人共若

干、**ゼニス公**(同市)の命を奉じ、至急の御前會議に、オセロを參會せしめむとて、迎への爲めに來りしなり、蓋し土耳其の軍艦、ゼニスの所領たる**サイ**<sup>◎</sup>**プラス島**へ押寄する模様あり、事跡甚だ急なる旨の注進あり、爲めに夜深にも拘らず、遽かに會議を召集するには至りしなり、オセロ斯くと聞き、左らば即刻參會せむと、身仕度なせし處へ、こたびこそ**ブラバンシオ**の一行、**ロデリゴ**を案内とし、手に、松明武器を携へ出來りしが、**ブラバンシオ**大聲擧げ、オセロこそ魔法遣なり、國法の禁ずる妖術をもて、我女を欺瞞したるに、相違あらず、左らば心弱き乙女の身をもて、人も厭ひ恐る、**黒人ムール**に身を任すの謂はれなしか、いふ邪道を修むる者を、此儘には放ち置き難し、物共打懸りて、取制へよ引立て行かむといきまゝ、オセロ徐ろに遮りていふ、されど如何にせん、至急の御前會議にとて、召されし身な

り、此まゝ貴意には従ひ難しと、折しも居合せたる**カッシオ**の一行、非常會議のあらましを語り、**ブラバンシオ**が館へも召集の使者向ひし筈なれば、閣下も速かに登營せらるべしと告ぐ、**ブラバンシオ**これにて驚き呆るゝこと暫らく、懸て一同出てゝ行く

第三場 會議堂の大廣間には、**ゼニス公**を初めとし、元老院議員大勢卓を圍み、土耳其艦隊の隻數襲撃の地點に就て談論しつゝある處へ、**ブラバンシオ**、**オセロ**、**イアゴ**、**ロデリゴ**等參着、公はオセロに向ひ我等は即刻卿を煩はし、土耳其軍の防禦を講ぜざる可らずと述べ、更に**ブラバンシオ**に向ひ、今迄卿の參會なき爲め、有益なる卿の助言を聞くを得ざりしは、残念なりし由をいふに、**ブラバンシオ**此處をよばかり乗り出し、否とよ某こそ閣下の御助力を願はては叶はぬ事あり、今夜かく某が登營したるは、重要な

る國事の爲めにもあらず、如何なる大事も、現在の某が、一身の悲嘆を忘れしむるに足らずと嘆くを、そは何事ぞと問はれて、某が女は一悪漢の爲めに、妖術をもて欺かれ、父を棄て、彼が許に奔りたる由を告ぐるに、左らば其悪漢を捕へ、卿の権力もて、國法の許す限り、嚴罰を加ふるが宜からむといへば、其悪漢こそ誰あらむ、これなるオセロなりといふに、一同愕然としてたゞ呆るゝ斗りなりしが、公はオセロに問うて曰く、卿には之に對して辭ありや否やと、オセロ答へて曰く、某、これなる老人の女を連れ出し、結婚なしたるは事實なり、然れども、果して妖術を用ひて、女の心を迷はし、や否やは、此戀の成立を一通り御聞下さらば、忽ち明瞭なるを得べし、たゞ武人禮に姻はず、大宮人の雅びたる辯舌を有せざるを恨むと、議官の一人乃ちオセロに乞うて曰く、願くは其戀物語を聞くを得んと、オセロ答へていふ

先づデスデモナを召喚し、彼女をして彼女が父の前にて、一伍一什を語らしめよと、公は直ちに使者に命じてデスデモナを伴ひ來らしむ、さて彼女が參着を待つ間、オセロは其大略を語りていふ、彼女が父ブラバンシオは、日來某を愛し、某を館に召させ給ひて、某がこれまでの經歷、攻城野戰の數々、自ら歷廻りし諸國、嘶などを打聞き、樂みとせられたるが、デスデモナ將た某が物語に痛く身を入れ、その聽聞に執心の様子なりしが、家事の爲めに屢ば中坐、聽聞意の如くならざるを察し、或日別に彼女の爲めに、特に某が身上、嘶をなしたりしに、某が少壯の折の痛ましかりし身上、危うかりし冒險の談などには、涙を流して耳傾けられしが、聽て其物語の終りし後、某が得たる報酬こそ、即ち彼女が愛情にてありけるなり、某が用ひし妖術とは、即ち是のみと、此時既にデスデモナは伴はれて入來りしが、ブラバンシ



オは急ぎ彼女に向ひ、汝は果して少しなりともオセロを戀ふか、汝が尤も多く服柔の義務を負ふは汝の父にあらずや如何と、デスデモナ答へて曰く、此日來教育の御高恩敢て忘るべくもあらねど、其昔我母の生みの父御を外にして、父上の御許に奔り給ひしやうに、今は妾もオセロが許に奔りし上は、先づ何人よりもオセロに従ふが女の義務にやあらむと、ブラバンシオ斯くと聞いて、今は全く絶望の淵に陥り、さては女さへさる心にてありけるかよし、今は女に用なし、最早浮世にも用なき身なり、此上は早や、國事の御談合を始められよと、是に於て公はオセロに向ひ、土耳其の軍勢サイブラスに寄する山を告げ、さてオセロを以て彼島の總督となせば、土耳其軍防禦の儀は卿督て引受けられよといふに、オセロ直ちに其旨を了し、他の議官よりの請求もありて、左らば今夜これより直ちに彼地

へ向け發足せむと決し、さてデスデモナをば如何にせむとの問題起りしに、デスデモナは自ら進みていふ、妾はオセロの心を愛するもの、顔貌の戀をなすものならず、さてかく夫婦となる上は、夫が戦場の千辛萬苦を外に見て、安閑と家に在るべきならず、願くば妾をも戰場に伴ひ給へと、公も其意を諒とし、オセロ將た喜んで之を諾しければ、乃ち明日イアゴーに護衛せられ、イアゴーの妻エミリアを侍女となし、オセロの後を追うてサイブラスに航すべき手筈となし、今夜の會議は是にて閉會、一同退散せしが、後に残れるロデリゴはイアゴーに向ひ、さて、おもしろからざる結果かな、此上は早や詮術盡きたり、今は世に生存する甲斐もなしと嘆くを、イアゴー且つ嘲り且つ勵ましながら、否々失望すべきにあらず、汝若し男兒ならば、速かに能ふ限りの金子を集め、汝が財布を充たして、サイブラスへ

行け、デスデモナとて、何時迄か彼の黒人を愛すべき、早晚オセロを厭ふの時機來らむ、其機會を逃がさず、彼女を汝が有となさむ計畧は予が方寸にあり、汝は只だ財布を充たして、彼島に航せよと、ロドリゴ一又々其詭辯に弄せられ遂に其意に従ふこととなり、イアゴ一後にて獨りにつたりと笑み、己が猜智に長けたるを誇るの獨語をなす

## (第二幕)

第一場 舞臺は轉じてサイプラス島海岸の一市となれり、此島の舊總督モンタノ并に他の二三の紳士海岸に立ち沖を眺めながら、昨夜の暴風の噂をなし、土耳其艦隊の行衛如何と案じ居る所へ、カッシオが乗船無事に入港、土耳其艦隊は悉く破壊したれば、戦争は未だ戦はれざるに、既に終を告げたる由を報ず、然れども茲に只一つの氣遣はしきは、同時にゼニスを出

てたるオセロの乗船は、途中暴風の爲めに吹分けられ、行衛不明となりしとの一事なり、かゝる所へ間もなく又一艘のゼニス船到着せり、こはデスデモナ、イアゴ一、ロドリゴ一の一行なり、デスデモナは上陸するや否、オセロの既に着せしや否やを問ひ、其彼女よりも一日早く出帆したるオセロの乗船の未だ入港せざるを聞き、憂ふること一方ならず、心も心ならざるを、心にもあらぬ談話に紛らし居る中、艦て又一艘のゼニス船入港し、これにてオセロ無事到着の由報ぜらる、間もなくオセロ登場、一同と相會し喜ぶこと一方ならず、就中オセロ夫婦が再會の喜び盡へむに物なく、かくて相携へて總督府なる海岸の城内に入る、一同の去りし後にて、イアゴ一はロドリゴ一を呼び留め、告げていふ、デスデモナは早やカッシオを戀ふるに至れり、さればカッシオこそ汝が戀の敵なり、汝が戀を果たさむには先づ

カツシオを此島より追はざる可らず、その方法はかくの如し、今夜の警固は、カツシオと予とにて勤むる筈なれば、汝も警固の場に行き、折さへあらば、カツシオを怒らすやうの行爲を爲せ、彼は極めて怒り易き性質の者なれば、汝が行爲を見て大に怒り且つ狂はむ、さらば予はそを利用して此市中に大騒動を惹起さしめむ、其上はオセロとて彼を副官の地位に置くこと能はず、必ず彼を追ふに至らむ、汝はそを試むべきや否やと、愚鈍なるロドリゴは直ちに此言に従ふべき由を約束す、蓋しイアゴは、此方法に由て、己れ副官の地位に替らむとするなり

第二場 傳令使登場市街を巡りて、今夜は土耳其艦隊全滅の喜びに、新總督オセロ殿新婚の祝賀を兼ね、各人好む所に従ひて、喜びを表せよ、酒宴遊興歌舞爆竹勝手たるべし、今夕五時より十一時の鳴鐘迄を以て其期限とな

すと

第三場 城内の一室にて、カツシオはこれより警固を張らむといふを、イアゴ一暫しと留め、今夜の芽出度を祝して、共に一杯を傾けたしといふ此島の若紳士二三、戸外に在り、呼入れ給へと告ぐるに、カツシオ固く辭し、酒には弱き拙者なり、數杯を傾けなば、忽ち我を忘れ、思はぬ行爲を爲すに至らむといふを、強いて呼入れしめ酒を命ずるに、忽ちカツシオは亂酔し、既に正氣を失ひ、怒り上戸の鼻息荒く、喧嘩の相手もがなといふべき様子を見計らひ、イアゴ、密かにロドリゴに告げ、彼に挑ましめしかば、カツシオは大に怒り、刀を抜き、ロドリゴを追廻すを、來客中のモンタノ取制へむとせしに、カツシオこたびは、モンタノに組付き、離さばこそ、打つ拵るの眞最中、ロドリゴは市中に奔り出て、大聲を發して事ありくと叫び

しかば市の警鐘は鳴渡り、事態甚だ容易ならざるにぞ、オセロも何時か聞きつけ出て来り、此光景を見て、且つ驚き且つ怒り、始終を糺問の上、カッシオが官職は今宵を限り、剥ぎ取る旨を宣告せり、さて一同の退散したる後、今は酔も覚め果て、後悔臍を噛むばかりなるカッシオの傍にありて、介抱なし居たるイアゴは、かにかくと慰めつゝ、今の場合他に詮方もなければ、只管デスデモナ夫人に哀願し、夫人の情深き心に頼りて、大將への詫を叶へ給へと進むるに、カッシオも實もと思ひ、さらば忠告に従ひ、明朝早速夫人と會見し、其旨哀願せむとて別れ去りつ、後に獨りイアゴは、密かに笑坪に入りつゝ、獨語すらく、情に厚きデスデモナは、必ずカッシオを憫み、彼が爲めにオセロに向ひ、五月蠅き計りに、彼が宥怒を請ふならむ、其機を利用し、我は密かにオセロの耳へ、一種の毒を注入せむ、先づ明日は、我妻エ

ミリアをして、夫人とカッシオとの會見を周旋せしめ、我は其間オセロを他處へ誘ひ出し、夫人とカッシオとの會見のまだ終らぬ處へ連れ歸り、二人が對話の光景を望見せしめ、さてこそ思ふ坪へ云々と

## (第三幕)

第一場 昨夜は遂に隙も合はざりしカッシオは、早朝城門外に音づれ来て、デスデモナと會見の事を周旋せしめむが爲め、先づエミリアに會見を求めし處へ、折よくもイアゴの來るに遇ひ、其由を告ぐるに、イアゴ左らば早速愚妻を御目に懸らすべし、某は亦オセロを暫し他處へ誘ひ出すの策を講ずべしと、例の親切めかして別れ去れば、間もなくエミリア出て来り、カッシオの依頼を快諾し、左らば今より直ちに、夫人と會見の場處へ案内せむとて、カッシオを導いて入る

第二場　オセロ本國政府への報告書を船長に交付すべき山イアゴーに命じ、さて己れは是より砲臺を巡視すべければ、汝は後より尊ね來れと告げて出て行く

第三場　城内の庭園にて、デスデモナ、カッシオを引見し、其哀願に耳傾け、大に同情を表し、カッシオが爲め、オセロの心を和らげ、復職の許可を乞ふは、妾が方寸にあれば、其儀は心安かれと慰撫する中、オセロ、イアゴーに導かれ、彼方より入來る姿の見ゆるにぞ、カッシオは折悪しと急ぎ出て、行く、此有様を瞥見したるオセロは、少しく不快の念を生じたる様子を直ちに、見て取れるイアゴー、あゝ、好かぬと獨言つに、オセロを問答め、今出行きしは、カッシオならずやといへば、否々、カッシオにはあらざるべし、閣下の姿を見るや、直ちに、宛ら罪ある者の如く、狐鼠々々と出行きしは、よもカ

ッシオにはあらざるべしと、此問答にて、少しく疑念を生じたるオセロは、間もなく、デスデモナの前に至り、今出行きし者の何人なるやを問ふに、案に違はず、カッシオなりといふさへあるに、デスデモナは、口を極めて、カッシオの憫むべきを説き、妾に免じて、彼が罪を宥し、彼が復職の願を叶ひさせ給へと勸むると、甚だ切なり、やがて、デスデモナの去りし後にて、今やオセロが心は、疑惑の雲に掩はれ、めしに乘じ、イアゴーは、其獨得の奸獍、邪智の詭辯を弄し、意溢れ、言訥するが如き、素振を粧ひ、盛んに、オセロの疑心を挑撥し、つゝも、要領を得るが如き、得ざるが如き、不即不離の妙語を放て、尙ほ、デスデモナとカッシオとの間の關係は、巨細彼が胸中に詳かなるが如き、風を見せしかば、道が沈勇を以て、名高きオセロも、嫉妬の情の湧き來るを、制へ得ず、推返し、イアゴーを難詰すれば、イアゴーは、實は我が思ふ坪へ

引入れながらも、止むを得ず白状するが如き面持にて、證據としては擧ぐるを得ざれど、心を鎮めて、夫人と、カッショオとの間柄を、注意せられよと告げ、他く迄忠義顔して、かにかくと心添へをなして出て行きつ、引違ひてデスデモナはエミリアを従へ入來り、正餐の準備既に成り、今日招待したる此島の貴紳等大將の臨席を待ちつゝあるよしを告げ、ふと仰ぎ見れば、オセロの顔色尋常ならざるに、如何したると問へば、頭痛みて堪へ難き程なりといふ、左らば此手巾にて頭を縛し給へと進むるを、否とばかりにかき退くる拍子に、手巾は地に落ちたれど、二人ながら心にも留めず出て、行く少し遅れて出行かむとしたるエミリアは、此手巾を拾ひ擧げ、これぞオセロより愛情の紀念にとて夫人に贈りたる大切の品なり、夫人は日來肌身離さず所持せらるゝを、何故にやあらむ我が夫、イアゴの密かに竊み取

りてよと度々妾に請ひたりしが、今こそ幸ひイアゴに贈りて喜ぶ顔を見むと獨語つ處へ、イアゴ入來りて奪ふが如くに取上げ、此手巾の一條は、必ず人に語ることを勿れと、誠め、此上は、此手巾を、カッショオが宿所の中に落し置き、彼をして拾ひ取らしめむとつぶやく、さてオセロは我が最愛のデスデモナに不貞の疑ありと知るや、心の平和は全く破られ痛恨に堪へず、かゝる疑惑の中に彷徨する苦痛は、我が堪ふる所にあらずとなし、獨り胸を痛めつゝ歩み廻れる中、忽ち又イアゴを見、半ば憤るが如く半ば訴ふるが如く、確かなる證據を擧げて疑惑を解け、よくもあしくも事相の確證を知らむと迫るに、イアゴは止むを得ざる風情を裝ひ、カッショオが寢室の嘜語なりとて淫猥なる出鱈目を告げ、更に夫人が秘藏の手巾を、カッショオが手中に認めたりと告ぐ、オセロ今は疑ふ所なし、二人が不義は確實

なり、此上は二人に對し、必ず、殘酷なる復讐をなさず、は止まじと誓ふを、イアゴも此上はオセロの腹心として、復讐の事を助け、如何に殘忍の行爲たりとも、辭することなかるべしと誓ふ

第四場 オセロ、デスデモナに向ひ、眼を拭ふに、托して、手巾を求む、デスデモナは今身邊に持合はさざるを以て答ふ、オセロさてはと思ひ、求むること益す切に、寸時の猶豫もなく今の間に持來れと迫るを、デスデモナはオセロにさる疑心ありての上の事とは知らねば、却てカッシオが復職の嘆願を反覆するに、オセロ益す怒りて、荒けなく罵りたけりて出立る、間もなく入り來るはカッシオとイアゴなり、イアゴは益すカッシオを促し、五月蠅き迄に、デスデモナに嘆願せよと勸めしかば、カッシオはデスデモナの前に至り、又大將への周旋を懇願するに、デスデモナ悄然として、今は

大將の御機嫌宜しからざる由を告げ打嘆くの場あり、聽てデスデモナはエミリアを伴ひ退場入替りて、カッシオが情婦ピアンカ登場、カッシオが此頃彼女を疎外するを詰り、今夜こそ彼女が宿にて晚餐を共にせられむことを要求す、カッシオは己が宿にて拾ひ取りたる例の手巾を取出し、之れが刺繡の摸型を寫し取らむことを命ず、ピアンカ其出處を疑ひなどし、結局カッシオが今夜尋ね行き晚餐を共にせむといふをもて折れ合うて去る

(第四幕)

第一場 城門外にてオセロ、イアゴと立談、カッシオの事に及ぶや、萬感胸に迫り、オセロ遂に卒倒す、イアゴ心冷笑しながら介抱なし居る中、カッシオ登場、此躰を見て驚くを、オセロは新たに癩癩の病を得、昨日も既

に此の如く人事不省に陥りたりき、されど間もなく正氣に還るべければ、足下は早く此處を去れ、さて後刻又尋ね來られよ、オセロ在らざる時足下と會談すべき一大重要事ありと、カッシオ乃ち退場同時にオセロは正氣づきしをイアゴ―慰め勵まし、遂にカッシオが今しも此處を通り懸りし由を告げ、更に辭を設けて程なく再び此處に來るやう告げ置きたれば、戀てカッシオは又來らむ、閣下は暫し彼方の物蔭に忍びて、カッシオが一擧一笑を具さに觀察せられよ、某は彼をしてデスデモナ殿に對する惚話を語らしめ、何時頃より情を通じ、密會の場處は何時何處等の事實を巨細に吐かしめむと、オセロは既に事實を確信し復讐の事を誓ひしと雖も、尙ほ確證を得たしとの念あれば、喜んでイアゴ―が此献策に同意しける時、早くもカッシオが彼方より來懸るにぞ、急ぎ物蔭へ潜めば、カッシオはオセ

ロ既に在らずと思ひ、づか／＼と入來るを、イアゴ―莞爾として迎へ、深く案じ給ふこと勿れ、デスデモナ殿に依頼せる上は、早や安心なりと、オセロに聞えよがしに云懸け、更に聲を潜めて彼が情婦ピアンカに關する談話を仕向け、世にピアンカ程男思ひの女はなし、彼女のいふ所に依れば近日結婚の式を擧ぐるとは、誠かなど出鱈目を云へば、カッシオも道が愛する女の噂をされては、思はず破顔微笑せざるを得ず、問はれ釣らるゝまゝ、彼女との情交のあらまし、彼女がうるさき迄彼に付き纏ふとなど、何時か相好を崩して仕方交りに談ずる光景、物蔭より覗へるオオロの心には、凡て彼とデスデモナとの交情を語るが如くに見ゆるう、たてさ、折も折かゝる處へピアンカ登場、嫉妬の眼ざし凄まじく、カッシオに向ひ、先刻の手巾は何處ぞの女よりの紀念物に相違なし、そを妾に命じて模様を寫さしめむ



とは、妾を愚にするも甚だし、先づ此品は卿に還さむ、今夜の晚餐だけは卿の來會を待ちもせむと、彼の手巾を擲ち去れり、イアゴー乃ちカッシオを勸め、後よりピアンカを追はしめ、別るゝ時、今夜はピアンカの宿に赴くや、否やを問うて、其、赴く由を確かめ、つかくてカッシオの去るや、オセロは物蔭より出來り、愈よ彼等が不義醜行に疑なき由を云ひ、デスデモナの殺戮はオセロ親ら手を下し、カッシオはイアゴーの謀殺に任す趣を談合せる所へ、ゼニス政府よりの使者、<sup>○</sup>ロドビゴ<sup>○</sup>ー<sup>○</sup>、デスデモナと共に登場公<sup>○</sup>よりの書面をオセロに授く、オセロをを一讀し居る中、ロドビゴーはイアゴーに向ひ、カッシオの安否を問ふを、デスデモナ嘴を入れ、オセロとカッシオとの間に起れる不和を陳べて嘆息す、オセロ眼を書面に注ぎつゝも心はデスデモナが不義の一事にのみ向ひたれば、デスデモナが、<sup>○</sup>ロドビゴ<sup>○</sup>ー<sup>○</sup>に向

ひ、カッシオを憫むの語あるを聞く毎に、奇なる怒りの聲を發すること、一再ならず、<sup>○</sup>ロドビゴ<sup>○</sup>ー<sup>○</sup>は、惟ひらく是れ公の書面がオセロを怒らせしならむ、蓋し公はオセロを召還し、カッシオを留めてサイプラスの政を執らしめむとの命令を發したるなり、然どもオセロは遂に怒に堪へざる者の如く、満座の中にて、<sup>○</sup>デスデモナ<sup>○</sup>を打擲せり、<sup>○</sup>デスデモナ<sup>○</sup>理由は知らざれど、席にあらば良人の怒を大ならしめむを恐れ退場す、オセロも亦た後より退場振殘されし<sup>○</sup>ロドビゴ<sup>○</sup>ー<sup>○</sup>は、且つ怪み且つ呆れつゝ、<sup>○</sup>イアゴ<sup>○</sup>ー<sup>○</sup>に向ひ、オセロの無作法を難ず、<sup>○</sup>イアゴ<sup>○</sup>ー<sup>○</sup>は例に依て詭辯を弄することあり

第二場 城中の一室にて、オセロ、デスデモナに侍女とし事ふるエミリアを糾問し、<sup>○</sup>デスデモナ<sup>○</sup>とカッシオとの關係を語らしめむとすれども、エミリアはさることのあるべき理なしと斷言し、<sup>○</sup>デスデモナ<sup>○</sup>の無實を主張し

て止まざるに、さらばデスデモナを伴ひ來れと命ずれば、デスデモナは聽て入來れり、エミリアを戶外に立たしめ、オセロ、デスデモナとたゞ二人居並べば、萬感交も至る。オセロが胸中や如何なりけむ、仔細も語らずたゞ汝は夫を辱しめたり、不義不貞の行爲をなしたり、汝は賣女なり、遊女なりと罵詈譏を極めつゝ、胸中無限の怨恨を獨語すること頻りなり、驚き惑ふデスデモナは妾は決してさる婦人にあらず、一人の夫を守る貞操無二の貞女なりとて誓文立て、争へども、オセロ一向に聽入れず、聽てエミリアを呼入れ、己れは席を蹴立て、退場せり、後にデスデモナは獨り此不思議なる濕衣の出處に迷ひ、此上はイアゴーを呼び、此始終を語りて、其原因を探らしむるに如かずとなし、直ちにイアゴーを呼入れしむ、間もなくイアゴーの來れるに、二人口を揃へて大將が罵詈惡口の次第を語り、其原因の

那邊にあるや更に了解し難き由を云ふに、イアゴーを思ひも寄らぬ事にはあれど、恐らくは國事に關する心配事の爲めに、御心にもなき入つ、當りをせられしなるべし、其御心配事だに過去らば、元の大將殿にならせ給はむは疑なしなど慰むる中、晚餐を報ずる喇叭の音の聞ゆるに、デスデモナはエミリアと共に涙を拭ひながら退場、イアゴー一人残れる所へロ德里ゴー入來り、又イアゴーを責め、何時迄待てども玉は手に入らず、携帯の財布は空虚となりて、世に一文なしの身となれり、此上は自ら進んでデスデモナを見、今迄の一伍一什を打明け、是迄デスデモナにとて送れる無数の寶玉を取戻し、我戀を願下げとなさむ、若し此等の寶玉我手に還らずば、我は足下に對して相當の處置を取らむと思ひ決したる顔色たゞならずるに、イアゴーは例の落つき拂ひ、足下にして其勇氣あるを聞けば頼もし

とも頼もし、足下の戀は間もなく成就せむ、たゞこゝに一の難事あり、足下は未だ知らざるべけれど、今日、エニスより使者來り、オセロは此島を去ることとなり、カッシオ代て此島の總督たるやう命ぜられたり、さればデスデモナはオセロに従ひ、直ちに此島を去るべし、さては足下の望も叶ふまじければ、デスデモナを此島に引留むるが第一の手段なり、それには、彼のカッシオを如何にかして、オセロに代るべき資格なからしむるが、安全の策なり、驚く勿れ、カッシオは今夜彼が情婦ビアンカの許にあらむ、予も彼と共に彼家にあらむ、さて十二時と一時の間に彼を促し歸途に就かむ、足下は時刻を測り、途中に待伏して彼を斬れ、予も傍に在て足下を幫助せむと、例の詭辯を弄してロ德里ゴを弄絡す、ロ德里ゴ遂に又之を諾す

第三場 エニスの使者ロドリゴを饗せる晚餐終りて、ロドリゴの辭

し去るを、オセロ散歩ながら彼が宿迄送り行かむとて出て行く、出て行く時デスデモナを顧み、今夜は汝の閨房より侍女を遠ざけ、只一人にて眠に就け、予は間もなく歸り來らむと、デスデモナ其何の故なるを知らざれど、命のまに、侍女エミリアに此由を告げ、如何なる心にか、臥床の上には結婚の當夜用ひたる蓐被を敷かしめ、さてエミリアの助を借りつゝ、衣服を脱する中、ふと胸に浮びしは柳の歌なり、こは彼女が母の侍女なるもの戀人に棄てられし、死の床に歌ひながら死しける歌なり、デスデモナは此歌を思ひ出すと共にそを歌ひ試みむとの念止み難く、遂に之を歌ひつゝ、寢衣を着了し、即てエミリアと相別る

## (第五幕)

第一場 イアゴ、ロ德里ゴをして街上の一隅に身を潜め、以てカッシ

オの来るを待たしむ時は、十二時と一時の間にて、カッシオはピアンカの寓より、今しも歸り來ると見えたり、イアゴー自身も少し離れたる處に待ち居る中、纏てカッシオは來れり、ロ德里ゴーは斬りつけたり、然れどもカッシオは不思議に無事なるを得、且つ抜合せて却て、ロ德里ゴーに重傷を負はせしが、イアゴー後より忍寄りて、密かにカッシオの脛を薙ぎ去れり、此に於て二人の負傷者は街上に平臥して、交るゝ救助を呼ぶ中、ロドリゴー、グラチアノの二人來り合はせ、此聲を聞きつけ、急かすがに思ひ惑ふ所へ、イアゴー奔り出て、恰かも此深夜の叫聲を聞きつけ、わざゝ出來りしが、如き風を裝ひ、二人に會釋してカッシオの傍に立寄り、如何したると問へば、何者にか問討せられしなるが、下手人の一人は此邊りに倒れ居らむといふ詞の終らぬ中、ロ德里ゴーが又救助を呼ぶ聲のするに、イアゴー

つと奔り寄り、己れ惡漢と云ひ、ま、ロ德里ゴーを刺殺せり、さてこれにて彼の二人も負傷者のカッシオなることを知り、驚くこと大方ならず、兎も角もカッシオを彼が宿所へ擔ぎ込まむと、倚子を轎となし、人夫を傭うて荷ひ去らしむ、此以前彼のピアンカも叫聲を聞きつけ出來りしが、カッシオの負傷せるを知り、大に愁傷の躰なるを、イアゴー意味有氣に、ピアンカを視て、此女こそ、カッシオ暗殺の陰謀に關係あるべき疑ありとなし、乃ちピアンカを引立て、一同と共にカッシオの後を追うて行く

第二場 一燈幽かに燃ゆる寢室の中、臥床の上には、デステモナ既に眠りてあり、ロドリゴーを送りて歸來れるオセロは、今や殺意牢として、抜く可らず、然かも床上に眠れる天使の如きデステモナが姿を見ては、感慨に堪へず、大理石像を欺く彼女が肌膚に、刀痕を加へて、醜うするに忍びず、せめ

ては刀痕をも與へず、血をも流さざる様に殺害せむと謔きつゝ、眠れる唇に向ひ、訣別の接吻をなすこと、兩三度、デスデモナ遂に目を開けば只ならぬ夫の様子に、今更のやうに驚きつゝ、問答數回にして愈よ夫に殺意あるを知り、其理由を問へば、カッシオと不義の行爲ありし由を述べ、其證據としては、嘗てオセロが與へし貴重の手巾をカッシオに贈り、現在カッシオがそれを所持するを目撃せりし事實を擧ぐ、デスデモナ百方辯解すれども、オセロ頑として聽かざるに、然らばカッシオを呼寄せ尋問せられよと云へば、カッシオは既に白状せり、然れども今や彼が口舌は永久に閉ぢられたり、今頃は、イアゴーが既に彼を殺害したる筈なりとのオセロの言に、思はず、戦慄しつゝ、尚ほ明日迄妾を生かし置きてよと乞ふに、聽かれず、さらばせめて祈禱を捧ぐる間と乞へども、それも聽かれず、オセロは遂に彼

女を床上に、壓殺せり、デスデモナの未だ全く息を絶たざる中、烈しく扉を叩く者あり、是れ別人ならず、何事をか告げむとて、エミリアの奔り來れるなり、オセロは寢臺の帷帳を引きて、デスデモナの屍を見えぬやうになし、さて扉を開けば、入來るエミリアは遽たゞしげに、只今彼方の辻にて殺人犯あり、エニスの若紳士ロ德里ゴなる者カッシオ殿の爲めに殺されたりと告ぐるに、さてカッシオも殺されたりしかと問へば、否なカッシオは殺されずといふに、オセロ意外の感爲す中、帳中のデスデモナはまた息の根の残り居けむ、幽けき聲にて、其身は無實の罪に死ぬる由を云ひて全く絶息す、エミリア初めて、デスデモナがオセロの殺す所となりし由を知り、殺害の理由はカッシオとの不義なりてふ、オセロの詞を駁し、て餘力を残さず、加之大聲を發して人殺しと連呼する中、モンタノ、グラチ

アノ、イアゴー等入來り、何事ぞと尋ね惑ふを、エミリア早速イアゴーに向ひ、卿は果してオセロに告ぐるに、デスデモナ殿不義の事を以てしたりやと問ひ、然りとの返答を得て、デスデモナの冤を雪ぎ、イアゴーの告口の誤れるを辯じ、しかく天使の如きデスデモナを殺害せし、オセロの恩を責むること痛切を極む、グラチアノ初めてデスデモナの横死を知り、デスデモナの父は女を失ひし悲みが素因となり、此程世に亡き數に入りたるが、想へば却て幸なりしと嘆くを、オセロ聞いてそを憫みながらも、デスデモナは正しくカッシオと不義の行爲ありたり、其證據は彼女の手巾をカッシオが所持するを、彼自身目撃したりと辯ずるを、エミリア聞きて、さてはと思ひ、當れることあり、否とよ彼の手巾こそは、妾が偶然拾ひ取りしを、兼ねて、イアゴーの望めるまゝ、暫し與へ置きつるなりと、容赦もなき高聲に、オ

セロも悟る所あり、一座の面々又さてはと思ふ景色に、イアゴー早や堪へずや、ありけむ、物をも云はず、我が妻、エミリアを刺して逃れ去る、かくと見て、モンタノは直ちに彼を捕縛し來らむとの目的にて、イアゴーの後を追ひ行きしが、暫くして、イアゴーを捕へ、ロドリゴーと輜に乗れるカッシオとをも伴ひ歸り來る、さてオセロはイアゴーに向ひ、かくまで彼を欺きし理由を尋問すれども、イアゴーは一切口を開かず、飽くまで剛腹鬼の如き大悪漢の運の盡きさこそと思はしむ、カッシオはオセロに向ひ、思ひも寄らず、彼が受けたる嫌疑は、根も葉もなきことなるを辯じ、且つ彼の手巾は己が宿にて拾ひ取りしものなるが、こはイアゴーが目的ありて、わざと其處に落し置きたるものなることを、只今イアゴーの自白に依て知れりと告げ、又ロドリゴー等も交る、オセロに向ひ、ロドリゴーが衣囊の中に

て發見したる二三通の書面にて、イアゴーが彼を教唆してカツシオを殺害せしめし事、又彼の祝賀の夜は、ロドリゴーをして、わざとカツシオに挑ましめ、遂に彼の如き大騒動を惹起し、爲めに彼をして副官の職を失はしめし等皆なイアゴーの計略なりしこと判明せる由を告ぐ、かくてロドリゴーはゼニス政府の代表者として、オセロが職權を返還せしめ、カツシオを以てサイブラスの總督となし、イアゴーの所刑はカツレオに委ね、オセロは捕縛してゼニスに伴ひ行き、政府に上伸する所あらむと告ぐ、されどオセロは今更、ゼニスに連れ還られ、耻辱を重ねるに忍びずや、ありけむ其場に、自刃して、デスデモナの屍骸を接吻し、其上に倒れて息絶えたり、一座の面々顔見合せ、長嘆息すること稍や久しくして幕(梗概完)

本篇に對する二三評家の言

本篇に對する諸家の評論は、沙翁劇中にも殊に其多きに苦む方なるが、何れも本篇を以て、キングリア、ハムレット、マクベスと共に、沙翁が四大劇と稱するに於て、一致せり、又中には、オセロを以て沙翁劇中の白眉と考ふる大家も尠からず、現存の沙翁學者にては、グツデン氏は「リア」を以て沙翁が唯一最大の成功と考ふれども、クレイグ氏は「オセロ」を以て「リア」の上に置かむとする者の如く、又故人にてはゲーテは「ハムレット」を以て、沙翁が天才の最上表現なりと稱すれども、コレリツヂは「オセロ」を以て、沙翁が成熟せる思想の全力を、驚くべき程、權衡善く表現したるものと考へ、又マコーレイは「オセロ」を以て、世界中の最大傑作なりと稱揚せり、更に其内容に關する評言としては、古來の名評と稱せらるゝドクトル、ジョンソン並びにハズリットの批評の一部分を左に抄譯すべし

ドクトル、ジョンソンは曰く「此劇の美點は、説明解釋の助けを借らずして、直ちに讀者の心上に強大なる印象を與ふ、度量廣く、率直にして欺かれ易く、人を信任すること度なく、愛情は燃ゆるが如く、決心は曲げ難く、復讐の念は屈し難きオセロが朴訥、怒りを言語に表すことなく、畫策に敏に、己が利益と復讐の考慮を忘るゝことなき、イアゴーが冷靜なる惡意惡行、己が眞價を信じ、己が無垢を自覺せる、デスデモナの溫雅朴實、又彼女がカッシオの爲めに、オセロへの哀願を容易に撤去せざりし無邪氣さ、己が嫌疑の的たることを容易に心付かざる罪のなさ等、是皆な沙翁が、近代の作家に求む可らざる程、人情の機微に熟通せるを表はすものなり

「イアゴーがオセロの疑心を深からしめし漸次の成行、及び彼が嫉妬心を煽動するが爲めに使用せし様々の情況は、如何にも巧妙に自然的に按排

せられたれば、設令、オセロ自身が自家を評して云ひし如く、容易く嫉妬は起さぬ男とまでは信ずるを得ざれど、彼がさばかりの嫉妬を起して、殆んど亂心に近づきたるを見ても、吾人は一片同情の涙を禁じ得ざるを覺ゆ……又エミリアは往々かいなての女性に見るが如く、其道念薄きが如くなれど而かも全く之を缺けるに非ず、動もすれば、輕小の過失は事もなく犯さむとするの傾向あれど、重大なる惡事を見ては、忽ち奮ひ立て之に反抗す云々」

ウキリアム、ハズリットは曰はく「オセロ」が吾人の同情を動かすことや非常なり、そが齎らす教訓は、沙翁劇の他の如何なるものよりも、人生に密接の關係を有するを以て、直ちに吾人の情緒を衝いて、切實の感を與ふ「リア」を讀んで受くる感動は、更に一層恐ろしく且つ激烈なるには相違なし、然



れども、オセロに比すれば不自然的にして、日常生活に縁遠し、又「マクベス」の中に現れたる人情もこれ程の同情は吾人に與ふることなし、「ハムレット」中の興趣は吾人の情を衝くこと更に迂遠にして且つ婉曲なり、「オセロ」に至ては、其興趣深遠なると同時に、同様の度に於いて感動的なり……

「オセロ」に於ける情の推移は、「マクベス」のとは非常の差あり、「マクベス」に於いては、殆んど初めより終りまで相反せる二の情緒の間に、即ち野心と良心の刺撃との間に激烈なる争闘あり、「オセロ」に於いては、相反せる二の情緒の衝突は、同様に激烈なれども、短時にして止み、其後は様々の情緒が代る／＼勢力を擅まにする所と、此上なく温かき愛情と、際涯もなき信任とが、何時か思ひも懸けず、嫉妬の苦痛嫌悪の狂念に移りゆく所とに、大なる興趣は感ぜらるゝなり……オセロが性質は高雅にして人を信じ、優美

にして寛大なれど、彼が血は最も燃え易く激し易し……沙翁が其天才と人情を描出するの能力とを十分に發揮したるは、此の如き大人物(オセロ)をして、急激なる而かも秩序ある變遷を経て、憫むべき境遇(嫉妬)に墮落せしめたる其手際にあり……イアゴの性格は沙翁が天才の逸出して成りたる副産物の一なり、穿ち過ぎたる或る評家は、此性格を以て不自然なりとなせり、其理由は、彼が爲せる悪事は、十分なる犯罪の動機を缺くを以てなりといふ、然れども詩人なると同時に哲學者なる沙翁は全く之と異なる考を有したり、蓋し彼は力の愛即ち一名悪事の愛は、決して人間に不自然ならざるを知れるなり云々」

譯者

オセロの悲劇

登場人物

ゼニス公

アラバンシオ 元老院議員

此外元老院議員大勢

ガラチアノ アラバンシオが會弟

ロドビゴ アラバンシオが一族の者

オセロ ゼニス政府に備はるゝムールの貴族

カツシオ 右の副官

イアゴ オセロの旗手

ロドリゴ ゼニスの紳士

モンタノ サイプラス總督府に於けるオセロが前

任者

道化役 オセロに召使はるゝ我邦の茶道の如き

者

デスデモナ アラバンシオの女。オセロの妻

エミリア イアゴの妻

ピアンカ カツシオが情婦

此外水夫、使者、傳令使、役人、紳士、樂人、  
從者等

場所

ゼニス及びサイプラス島海岸の一市

オセロの悲劇

第一幕

第一場——ゼニス 街上(時分は深更)

ロドリゴ、イアゴ登場

ロドリゴ 云はれなく、某が財布の紐の締括を、貴殿の自由に任すも何故、  
知りつゝ素知らぬ振は、御不親切と申すもの

イアゴ 決して、左様ではないが、よも辯解を聞いては呉れまい。若し夢  
にだにこんな事を、此身共が知て居たなら、それこそ如何なる憎悪で  
も

ロテ 貴殿こそ、彼奴(ロオセ)をば、憎み居るやう云はれしならずや

イア はて憎まいて何と致さう、先づ御聞きやれ、此市(マキ)のさる大官方が、三人迄も彼奴に向ひ、此身共を副官に御採用あれと、口づから腰を屈めて立ての依頼を、身共とてもさる地位に、足(タ)はぬ事は萬々ない、自ら固く信じて居るに、彼奴我意を貫かんず驕慢心から、大袈裟な情實(マコト)を並べ立て、生兵法の講義交りに暗(カ)き散し、擧句の果が、イヤ副官儀は、既に選定致してゐるとは、コリヤどうぢや、さて其彼が選んだ男といつば、口先斗りの生軍師(ナマ)、フロレンス生れのミカエル、カツシオと申して、女房の美しいので半分惹けた男、戰場にて一隊を率ゐしことは、思ひも寄らず軍配(イクシウ)の心得などは、娘(メ)子も同然、知つて居るは、兵書の中の小理屈ばかり、束帯の公卿(カキキ)でも、彼程にはやつてのけう、實技(ウツテ)なし

の口前ばかり、それが彼奴の技倆(キリヤウ)ぢや、乍去其男は首尾克く入選、ロドスの島や、サイブラス、其外正教異教の國々にて、現在彼も目撃なせしが如く、戦功ありし此身共は、貸借の勘定、算盤は、ぢく其外には、何も知らぬ素町人に見すゝ地位を奪はれしとは、とても好機會(コウキョウ)に廻り合せて、彼は副官、此身共は、あな、あはれ、ムール殿(ロオセ)のやつと、旗手(ハタテ)(副官に土居)

ロテ 副官よりも旗持よりも、某は寧ろ刑官となつて、彼奴を殺つてやめたかつた

イア ハテ今更どうなるもので、奉公の辛(ツ)いはこの事、昇進の道は手引手、夔年功で順々に進むなどは、逆も、さてこれにても、此身共が、彼のムールを憎まずに、居られるか、居られぬか、道理をよく考へて判ぜ

られい

ロテ 左様な者に從て居るとは、某などは厭な事だ

イア あゝそれはかういふ譯ぢや、身共が彼に從て居るは、彼を足場に  
して、自分に奉公を致すのぢや、人が皆主ともなれず、又主たるものが皆、  
忠義な家來計りは持たれぬもの、わが身を繋ぐ、頭の鎖を嬉しがり、主  
が厭の驢馬同様、當てがひの飼料の外に慾もなく、むざ／＼一生を空  
に過し、老さらばえて棄てらるゝ、馬鹿正直な忠義者も、世には中々  
多けれど、そんな阿呆は話の外、忠義らしい面体を粧り立て、心の底で  
はお主は何の我身の上、うはべ計りに何事も、主の爲めと見せ懸けて、  
其實主はほんの食物、己が腹を肥した上は、おさらばと出懸る家來も  
あるが、かやうな者こそ、少しは魂のあるといふもの、何を隠さう即ち

身共は其一人、尤も身共ぢやとて、若しムールと地位を替へたら、今日  
のイアゴーでないは、定身共が彼に事ふるは、たゞ自身に事ふるのみ、  
さら／＼彼に對し尊敬の、忠義のといふ爲めではない、さう見せかけ  
て、實は此方に目的がある、若し身共が表面に表す行爲にて、心の底が  
見え透く様なら、さらけ出した心腸を、袖の上にぶら下げて、鳶鳥の突  
くがまゝに任せるといふもの、イヤ身共は見懸通りの男ではない  
ロテ 此まゝで事が、濟むなら、彼の厚唇(黒人故)のオセロ奴は、ほんに何た  
る果報者

イム 此上は寸時も早う、デスデモナの父親、ブラバンシオを叩き起して、  
此始末を告るがよい、そしてオセロの後を追かけ、歡樂最中へ毒を注  
し、街上にて面の皮を剥ぎ、女奴が親族を煽ぎ立て、彼奴が溫柔郷のた

のしみに五月蠅く邪魔を入れさせて、よし歡樂を悉く奪ふ事は出来ず共、その歡樂の色の幾分なりと、褌め果る迄弄つて遣れ(此の時丁度に来が前)

ロテ 早や此處が、ブラバンシオの館の前、大きな聲で叫つて呉れうか

イヤ それがよい、繁華の市中で真夜中に、いつか燃え上つた火事の火の手を見付出した時の様な頓興な凄まじい聲を振立て、

ロテ モーシ、ブラバンシオ殿、ブラバンシオ大人、モウシ、

イヤ 御目覺あれ、ブラバンシオ殿、盜賊でゐる、盜賊々々、御館の中を御注意あれ、お娘御や御家財を、ヤア盜賊々々

ブラバンシオ二階の窓に現れ出る

シラバ けた、ましいい聲をして、拙者を呼ぶは何故ぞ、ハテ何事ぢや

ロテ 御家族に御異状は、ムりませぬか

イヤ 御戸締りに變つた事は

アラ 何故左様な事を尋ぬるぞ

イヤ これはしたり、閣下は御盜難に罹られましたに、ハテ御見苦し、早く御上衣を御召なされ、御胸も裂け御精神も消えよとばかりの、御心配事が出来ましたぞ、此今といふ今も、今、真黒な古牡羊奴が、御手飼の白牡羊を手籠に致して居ります、早や、閣下、警鐘鳴して市中の夢をば早や破らせられい、さらずば閣下の御孫に、とんだ魔物が持込みませう

アラ 何と、其方達は氣が狂ふたな

ロテ 恐れながら閣下、某が聲音に御記憶は、ムりませぬか

アラ イヤ少しもさういふ其方は

ロテ ロドリゴーでムります

アラ 然らば益す以て厭はしい拙者が館の近邊を彷彿く事は相成らぬと命じた事を忘れたか、何を隠さう拙者が娘は、其方に與れぬと告げしならずや、それを遺恨か晚餐の膳にたべ酔うて、狂亂の餘り悪意を挿み、拙者が安眠を妨害せむとて來りしよな

ロテ イヤ〜閣下――

アラ 乍去拙者には、其方共に思ひ知らせて呉れる程の勇氣もあり權力もある事を忘るなよ

ロテ 先づ〜お辭に――

アラ 何ぢや盜賊が這入つた、此處はエニスの真中、野中の孤屋ではない

ロテ モシ、ブラバンシオ閣下、清淨無垢雜氣なしの好意にて、閣下を御尋ね申せし某

イア はてさて閣下、さては閣下も神明に事へよと、告る者が悪魔ならば信心をも止めるといふ、其連中てムりますな、閣下のお爲を思うて参りし我等を、悪者なりとて御用ひなく、それ故お娘御を何處ぞの亞刺比亞馬に連添はせて御搦ひなされずば、追々御親族の中には、嘶さかくる甥姪やら、栗毛の従兄弟、葦毛の従々兄弟やらが、定めてお出來なさるてムらう

アラ 汚らはしい無禮者、其方は何者ぢや

イア 某はたゞお娘御が、彼のムールと畜生道の初山踏をせらるゝ事を、御報知申さむとて参りしもの

アラ 己れこゝな悪黨奴が

イア さいふ閣下は……いやさ元老院議官様

アラ ヤア、ロ德里ゴ、此かる無禮者を伴ひ來しも其方の責

ロテ

如何なる責をも負ひませう、乍去お聞なされ彼の美しの令嬢が、草木も眠る此夜深に、たつた一人の賤の男の、船頭風情を供にして(エニ市街は濠を以て通路となす故、何處へ行くにもゴンドラと稱する)邪淫極小船に乗るの必要あり、此小船を漕ぐ船頭を召連れたりとの意

まるムールの許へ、我から御身を任せられたは、全く閣下の御心から、熟と御勘考の末御許可有ての上でムりますかどうやらその様にも思はれますが——ハテ此れが御承知御同意での上の事ならば、いかにも某は大きな無禮を致しました、乍去此事を、微塵も御存じないならば、乍恐無禮は却て閣下にありと申すもの、不肖ながら禮儀作法も

打忘れ、妄りに閣下の尊嚴を冒すものとばし思されな、更めて申しませが若し閣下御許可ありての上の事ならずば、令嬢にはいかい御不孝をなされました、御一身の義理も容致も、知慧も未來も一緒にして、定まる宿とともない、異國人に任せられたは實でムります、御館の中を改めて御覽なされ、若し令嬢が御居室に、又は何處なりとも御館の中にあらせられたら、閣下を欺く某が罪、國法を以て、御處分なされても、苦しうはムりませぬ

アラ ヤア、誰かある燈石を打て、灯火持て、家中の者を呼起せ、どうやら夢とも思はれぬ今夜の事、想ひ遣ても胸が逼る、ヤア燈火を持て——

とアラバンシオニ階の窓より引込む

イア ロ德里ゴ、さらばぢや、身共はこれで行かずばなるまい、長居をし



て證人に喚出され、ムールの反對に立つは、穩かでない計りか、此身の  
 不利益ハテ此一事が、よしや多少の障礙を與へても、政府は中々、彼が  
 官職を奪はむことは思ひも寄らず、はや始まれるサイブラス島の戰  
 役になうて叶はぬ人物なるに、能く三軍を指揮すること、彼程の大將  
 が他にあらうとも思はれず、そこを思へば、身共も彼を厭ふこと、獄道  
 の呵責の如しとはいへども、現在の必要から、ほんのたゞの記號なが  
 ら、忠義といふ旗印を掲げねばならぬ仕義、足下は追手の者共を引連  
 れて、サキタリーの旅館に御出あれ、彼は必ず彼處に居るであらう、身  
 共も一緒に居る所存、おさらば

とイアゴー退場

アラバンシオ、並に燈火を携へたる家來大勢登場

アラ　こりや眞實も眞實の災難、女は逃亡振棄てられた此身の行末には、  
 悲嘆の外何も残らぬ、コレ、ロドリゴ、何處で娘を見懸けたぞ——不  
 憫の娘ナニ、ムール奴とぢや、あゝ人の親には何がなる、して何うして  
 娘ぢやといふことが分りしぞ、あゝ思ひも寄らぬ程父を出し抜き居  
 つた言葉でも懸け居つたか——もつとく、蠟燭點けい、親族縁者を  
 呼集めい、最早婚儀を済ましたか、さて何と

ロデ　仰の通り済ました事と存じます

アラ　さてもく、どうして家出を致したやら、あゝこれは、骨肉の謀叛ぢ  
 やな、あゝ世の父親達、初々しい舉動を見て、息女の心に氣を許すな、さ  
 ては年若い娘子の心を銷かす、何ぞ妖術がありはせぬか、どうぢやロ  
 デリゴ、さやうな物を、書物で、も見た事はないか(我女もオセの妖術

にわかれずやれし)

ロア ムリますとも

アラ 誰ぞ愚弟を呼起して參れ——寧ろ其方に與れ、ば宜かつた——

一人は西へ、一人は東へ早やうく——さて何處に、彼の駆落者は潜んで居るか、其方は承知か

ロア 屈竟の人夫を召連れ、某と御同道下さらば、訖度尋ね出して進ぜませう

アラ そんなら案内を頼むく、何處の家でも叩き起さう、拙者の詞に反抗うものはよもあるまい、物共物の具取揃へたか、夜術の役人も呼んでまゐれ、さらばいざロデリゴ、骨折の報酬は訖度致すぞや

と一同退場

第二場—他の街上

オセロ、イアゴ、并に従者共手にく燈火を携へて登場

イオ 戰場に於てこそ人をも殺せ、謀殺は致されぬが、良心の本牒でムリませう、時としては自己の利益とも相成るべき、悪心の足らはぬことを覺ゆる某、今も今、凡そ九度か十度程、彼奴が肋の下邊りを蹴付て呉れうと思ひましたが、(彼奴とはロデリゴを指すならむとの説、然れども此幕の開かぬ中よりの談話の續きなれば、無意味と見るもよし)

オセ 思つたばかりで、却て宜かつた

ロイ 乍去、彼奴閣下に對し、無禮傲慢な言語を吐き、聖賢ならぬ某には、堪へ切れぬ程でムりました、何はしかれ、はや御婚儀は御濟みなされま

したか、御聞あれ、彼のブラバンシオ殿は、いたく人民の尊敬受は其實此市の公よりも、二倍の勢力がムりますれば、閣下を追放せむと致すか、さらずば己が権力の有りつ丈を振廻して、國法の許す限りの呵責を加へむと致すは必定

オセ 如何なる事をも致さば致せ、拙者が從來國家に盡し、功勞は彼が不平の眩を、喋ませ得て餘りあらう、且や自慢も名譽と信ずる故公言致すが、元と拙者はさる王族の血統を傳ふる者、況して從來の功勞もあり、此度彼女を手に入し程の幸福は、立派に受ける資格がある、積つても見よ、あの優しいデスデモナを愛すればこそ、さもなくば、わたつ海の底にあるてふ、凡ての寶に代へやうとて、家持たぬ獨身者の氣儘な境界を振棄て、急屈な身の上になるべきか、アレ見よ、彼方より來

る灯の光は

イア デスデモナ殿の父君が、知己朋友をかり集め、尋ね廻るのでムリませう、家内へ御入りなされたが宜しうムリませう

オセ イヤ、拙者は逃げも隠れもせぬ、拙者の器量、役柄、潔白な精神に對しても、尾籠な舉動は致すまい、愈よ彼等に相違ないか

イア これは間違ましたやうでムリます

カツシオ及び若干名の役人手に、松明を携へ登場

オセ これは公の御家來と、某が副官でムつたか、よろこそ御出なされた、して何ぞ變つた事でも

シカツ 公よりの仰出には、時を移さず、即刻御登城あれとの事にムリます  
オセ さて何事であらうぞ

カツ サイブラスにて何事か火急の事件が起りし事と察しまする、今夜しも船が持て来る使者の數々、踵を接して到着致し、議官達も俄に召集相成ては、御前會議が始まらうと致す所、閣下の御宿所へも御召の使者が向ひましたが、御不在とあるに由て、御行衛を尋ねる爲め、某等を初め三手の人數が、更に處々方々へ向ひました次第で、ムります、オセ 其中にても、足下に尋ね當てられたは、何より僥倖、さてこれなる家に、一言申置くべき事が、ムれば、其後に、直様同道致すて、ムらう

とオセロ退場

カツ 旗手殿、大將は此家に何御用で

イア されば大將には、よい親船へ乗込まれて、ムるが、是が正當の御獲物と極つたなら、實に一生涯の御果報者

カツ 何の事やら一向解らぬ  
 イア 御結婚なされたと申す事  
 カツ それは何處の女子と

オセロ再び登場

イナ 南無三——大將にはこれより直ちに  
 オセ いざ、同道致さむ  
 カツ 閣下を御尋ねの人數が、又彼處へ参りました  
 イア あれこそブラバンシオ、大將、御氣付けられい、よも好意を以ての御出では

ブラバンシオ、ロアリゴ、並に役人共手に、松明、劍戟を携へ登場

オセ ヤア留まり召され

リテ あれがムールでムります

アラ 打据ゑよ、盜賊ぢや

と皆々拔連れ兩方に立向ふ

イア 其處に居るはロデリゴか、サア來い、敵手を致す

オセ 刃は鞘に藏められい、露が附着らば錆るでムらう、御老人、刃物三味

に訴へるより、御年齢に訴へて御思案なされたが宜しくはムらぬか

アラ エー汚はしい盜賊め、拙者が女は何れへ隠した、汝愚なれども、妖術

を以てたぶらかしたに相違あるまい、何う考へても彼の娘が、魔術の

鎖で繋いでないなら、あの優しい美しい樂しげな娘盛り、同國人の金

満家で、しかも美男の若殿原から、受くる結婚の申込さへ、承諾ぬ程で

あるに、何の世間の物笑ひに、親の膝下を脱出で、汝如き人非人のう

そ氣味悪い懐へ何を目當に逃込まうや、汚はしい妖術もて、たぶらか

したか、さもななくば、何を申すも纖弱い娘、魔藥を用ひて精神を鈍らし

たに相違はないと、拙者が鑑定に曇りはあるまい、ハテ他くまで糺明

致さいては、積つても大抵知れた事、世の中を騒がす、御法度の魔法遣

と見たは癖目か、それ物共彼奴召捕れ、反抗うたら容赦に及ばぬ

オセ 雙方とも静まりめされ、拙者の役割が廻て來れば、後見人の差圖は

なくとも、勝手に喧嘩は致して見せる、さて閣下には、某を何處へ御連

れなされて、御糺明なされますな

アラ 早速法庭を開き、汝を召喚致す迄は、先づ牢屋へ繋ぎ置く

オセ 仰せに従は、如何でムらう、國事に關して、早急に、公より某を御召

の使者、此處に相待ち居るものを、公にはそれでも御満足に思召されませうか

役人 げにその通りでムります、公には俄かの會議をお開きなされ、閣下の御館へも、お召の使者が向ひし筈

アウ 何と、公には會議を開かれしとや、此夜深に、イヤ此奴を召捕り引立てよ、拙者には等閑ならぬ理由がある、たとひ公御自身なりとも、又は同役の誰彼とて、よも之を他人事とは思ふまい、若しかゝる悪事を棄て置かば、奴隷共や蠻民風情が我廟堂の上迄彌蔓らうに

と一同退場

### 第三場—會議室

ニニス公、元老院議員大勢車を圍みて控へ居る、其他役人共

公 まだ今迄の所では、信を置くに足る程の、注進はないやうぢや

甲議員 いかにも所説まらゝくてムります、某への通信には、兵船凡そ百七艘

公 予が手許への通信には、一百四十艘とある

乙議員 某へのは二百艘、乍去たとへ精確の點は合はずとも、そはかゝる折にありうちの事、兎も角も土耳其の海軍、サイブラスへ寄するとの、一事丈は皆な明白

公 それはさもあるべきこと、多少の相違あればとて、虚報ならむと安心は致されず、恐れても恐るべきは其大躰に誤膠なかるべき一事なり、

水夫 (奥より) 御注進く

役人 海軍方よりの使者でムります

水夫登場

公 さて何事ぢやな

水夫 土耳其の軍勢、ロドスの島へ向ふに就き、此旨政府へ御注進仕れと  
アンデエロ閣下の御命令故、即ち馳参じましてムります

公 これはまた變つた注進ぢやが、各の考は

磯甲 どう考へても左様の事があらうとは、察する所敵を欺かむず擬勢  
ならむ、彼のサイブラスは、土耳其が爲めに要害の地、ロドスの島より  
遙かに樞要、加之防禦の設備も彼島の如く堅固ならず、さればサイブ  
ラスこそ、彼等が取らむと欲する所にして、又取易しとなす所、然るに  
其取易き所欲する所を棄て置て、欲せざる所、難き所に立向ひ、先んず

べきを後になし、無益の危険を冒さむなどと、土耳其はなか／＼左様  
な拙ない事は致しますまい

公 いかにも萬々、ロドスの島を襲ひは致すまい、イヤ又々注進が参りし  
様子

使者登場

使者 賢明なる殿下に申上まする、土耳其の海軍、ロドスを指して急ぎし  
が、其處にて後詰の兵船を待受け、今は總軍全く勢揃を了りましてム  
ります

磯甲 さればこそ某も、左様の事と考へ申した、して彼等が船數は如何程  
と思はるゝな

使 三十艘ばかりにムります、さて只今は元來し海路を取て還し、明白

にサイプロス攻撃の態度を表しました、忠勇兼備の御大将、モンタノ閣下の命に依り、御注進の次第右の通り、御信用あらせらるゝ様、伏て願上まする

公 さてこそサイプラスと極まつたり、さて、マールカス、ルツシコスには只今市中に居るかどうぢや

議甲 イヤ、フロレンスに居らるゝ筈でムります

公 然らば予よりの書面を認め、早馬を以て傳送致せ

議甲 ヤア、ブラバンシオ殿并に勇敢無比の、ムール殿が見えられました

ブラバンシオ、オセロ、イアエー、ロアリゴー並に役人共登場

公 勇敢なるオセロ殿、公敵、オットマンに對して、早速卿を煩すべきことがムる(アラバシ)、おゝ、卿も其處に、よろこそ御出乍去、今夜は卿が意

見と助言とを聞きえざりしこそ残念なりし

アウ それは某よりも申す事、御許容あれ殿下、今夜某を、寢所より起し申し、は某が役目でもムらねば、又承つた御用の筋でもムりませぬ、さては公の心配事も、現在の某には、少しばかりも感じませぬ、樋口を溢るゝ洪水の支ふべくもあらぬ程、堪え難なき私の悲みが、あらゆる心配事を打消して、某が心中は、只其悲みが一杯でムります

公 して、それは何事ぢやな

アウ 女、おゝ、女が

一同 頓死でもなされましたか

アウ いかにも某に取ては死せしも同然、彼女は辱められました、ムります、如何なる斂醫の調劑か、盛りつけられし魔薬と魔術で、精神を亂さ



れました。白痴でもなければ、盲目でもなく、人並の識別は有つた女、それが妖術の爲めなら、箇様な間違を致しませうや。

公 左様な邪なる手段もて、卿が息女をたぶらかし、卿が掌上の珠を奪ひし、其悪人は誰にもせよ、卿は親ら容赦のない法典を、如何程でも好な程、嚴酷な意味に讀みときて、處分せられて宜しからう。たとへば其悪人が、手が子息なりしとて、何條躊躇に及ぶべき。

アウ 辱うムります、其犯人こそ誰あらう、今夜國事の御爲めとか、特別の御召にて御召寄なされました、これこそな、ムールでムります。

一同 ハテ困つた事ぢやナア

公 (オセロ) 卿は何と言譯は

オセ 何のムりませう、事實かやうでムります

オセ 我が畏敬し奉る、至嚴至正なる殿下、並に御一座の高官方、某是なる老人の息女を運出しましたは、眞實でムります、加之結婚をも致しました、某が犯し、罪はたゞ是丈でムります、元來辯舌に嫻はぬ某、浮世の人の、優しい言葉遣ひは少しも存ぜず、七歳の幼立より、此今迄、天幕の中に起臥して、戦闘の事にのみ拘づらひ、平和な月日を送りしは、一年と迄はムりませぬ、されば某が口にし得る所は、只戦争の駆引許り、此廣い浮世の事は、何一つ存じませぬ、従て某が此度の所業に就き、辯解致しますればとて、ほんの無益でがなムりませう、乍去暫時の御辛抱を乞ひ奉り、取締のない骨露の戀の筋道、先づ一通り御耳を汚し参らせむ、ブラバンシオ殿の御詞通り、果して如何なる魔藥、如何なる妖術を用ひしや、其邊熟と御聞下され

アッ まだほんのおぼこ娘、我と思ひ浮べし事にさへ、顔に紅葉の初々しさ、さる生娘が、その性質、年の頃、生れ故郷、世の信用、あらゆる物を顧みず、日頃は見るも恐れし、荒くれ男を慕ふとか、完全無缺の乙女子に、左程まで自然の人情に背ける所業ありとは、取留もない臆断辨説と申すもの、必ず忌々しき邪道をもて、迷はせられしに相違ないと、見るより外に術もムらぬ、更めて申上まする、一度飲めば、血潮を亂す戀藥、さなくば妖術の魔水をもて、女は迷はせられたに極まりました

公 左様な淺蕪なる當推量、だらう量見などよりも、もつと明白な、確かな證據がない上は、何と申されても、それが證據にはなるまいが

隨甲 イヤ、オセロ殿、ちとよこしまな無理手段で、彼の少女が愛情を征服たか、但しは又互に思ひ思はれて、精神と精神とが通ふてふ眞實の戀

の筋道をゆかれたか、其邊よく御話し下され

オセ 願くば方々、サギタリ一の旅館へ使者を遣し、デスデモナを召喚の上、親父の面前にて委細を語らせ、熟と御聽問下されたし、若し彼女が白狀にて、某が所爲に、不正の廉を御見出あらば、某に對する御信任、官爵は申すに及ばず、嚴刑をもて、某が一命、御召上に相成るとも、露苦しとも存じませぬ

公 然らば、デスデモナを召寄せよ

オセ それイヤゴ、御使者を案内致せ、汝は彼處(サギタリ一の旅館)を承知の筈

とイヤ、及侍者退場

さて彼女が參着を待つ間、神の御前に懺悔を致す其様に、露隠し立なく、詐りなく、如何にして、某が彼の少女の愛を得るに至りしか、又如何

にして某が彼女を戀ふるに至りしか、ありやうを其儘白狀致すてム  
りませう

公 それは聽問致すてムらう

オセ 彼女が父親ブラバンシオ殿は、日來某を愛せられ、屢ば御館へも招

かせられ其度々に某が身上嘶、年々の閱歴、親しく經來りし野戰攻城、  
轉變の身の上どもを尋ねらるゝに、乃ち生立の昔より、其當時迄の經  
歴談、此上なう悲惨かりし椿事の數々、海陸の恐ろしき變事、間髪を入  
れざる不思議の逃亡、暴敵の捕虜となりて、奴隸に賣られ、漸く鐵鎖を  
遁れし物語、さては國々を經廻りし旅中の珍談、廣大なる洞穴、不毛の  
荒野、礦山、岩窟、天を支ふる山嶺、さては友喰の食人鬼、肩より下に、首の  
生えたる人間など、それやこれやを見聞のまゝに語りしに、彼のデス

デモナは、此物語にさも執心の跡なりしが、家事の爲めに度々中坐、な  
れども急ぎ用事を濟まし、戻來れば再び物語に耳傾け、更に他く事を  
知らざる様子、此跡を察せし某は、好機を見て此物語を、反復せむかと  
ほのめかせしに、頼むくとの切なる願斷續には、聞知れども、連續て  
は知らぬ廻國嘶、是非再びとの請を容れ、即ち改めての身上嘶に、若年  
の折の、慘ましかりし出來事共に及びし時は、彼女は甚く感動の除り、  
落涙に及びしことも幾そ度、さて、物語の終りし時、某が得たる報酬は、  
彼女が無限の溜息吐息實に不思議、此上の不思議やある、げに哀れ、此  
上の哀れやあるとの切なる詞、寧ろ斯る物語に耳傾けざりしならむ  
にはと、悔みながらも更に又、天我が爲に、かゝる偉丈夫を得させたら  
ましかばなど申されつゝ、某に感謝の詞を述べ、眞實卿が身上嘶は、何

人の口より出るも、妾が愛を惹いて餘ありなども申されました、さてこそ某も遂に意中を打明けました次第でムります、されば彼女は某が過來し幾艱難の故に某を愛し、某は亦彼女が其幾艱難を憐むの故に、彼女を愛するに至りました、某が用ひし妖術とは、是より外にはムりませぬ、イヤ最早彼女も参りましたれば、御聞糺し下さりませい

アヌアモナ、イアゴ、侍者若干名登場

公 其様な談話を聞かせられては、手が女などでも堪るまい、コレ、ブラバンシオ、かう事は破れても、穩便に纏めて置くが何寄、まとめて置けば破長刀も空拳には優る道理

アラ 何卒彼女が申す所をお聞き下され、眞實彼女が幾分なりとも、オセロを慕ふに相違なくば、彼を侮辱せし某が、天罰立るに至るべし、コレ

娘、先づ此のやうに、歴々方の御列席の其中で、其方が一番服従の義務を負ふは何人ぢや

アアス 父上様、妾が身に負ふ義務には二通りムります、父上には、生の御恩に此年來、御教育の御大恩、それに酬ゆる子たる者の義務、何の忘れて宜いものか、乍去父上様、妾も今は夫持、母上様が其昔し、生の父御を後にして、父上様に御附なれし其様に、此上は妾も亦、これなる我夫ムール殿に、従はねばなりません

アラ チエー、情なや、しなしたり——此上は殿下、お構ひなく、國事の御相談をお始めなされい、あゝ、有つまじきものは子なりけり、他人の子を養ふたが幾倍の優——ヤイ、ムール、女は喜んで貴公に呉れるは、まだこんな事のない前なら、貴公等風情に、指でも差せる事ではなけれど

——女むすめよく聴け、其方の外に、子といふものゝなかりしが、今思へば却て僥倖しあはせ、其方に懲りて妹等に壓石おしを附置く殘刻せうたかしさを見ずに済むは先づ何寄り、殿下某が用事ははや是迄でムリます

公 其諦めは、予も同意、此上は新夫婦との交際まじりをば圓滑まろうせらるゝ様ちと談義を致して聞かさう、治療の方の絶えたらば、絶望の淵にこそ、悲みは却て消ゆるもの、過去りし不幸を悲むは、新たに不幸を求むるに異ならず、運命の呵責も、勘忍の前には玩弄あそび物も同然、笑て盜らする人間は、盜とより何をか奪ふ道理、無益むぎに悲む人間は、自分で自分を刺ぐといふもの

アラ 然らば彼のサイブラスも、土耳其の自由にお任せなされ、此方こなたで笑つて居る間は、全く奪とられは致すまい、胸に幽鬱ふさふさのないものには、唯慰藉なぐさ

を得るのみ故、御忠告の名言にも服しませう、足らはぬがちなる勘忍袋から借金して、悲みへ拂へとは、苦艱の重荷へ名言の重荷を添ふると申すもの、兎角名言と申すものは、場合次第で、甘くもなり苦くもなるもの、詞ことばは詞丈耳ことばだけみみからの注薬しやくで、心の苦痛が癒なをつたとは、聞いた事もムリませぬ、イヤ此方こなたにはお構ひなく、何卒國事の御相談をお始め下され

公 さらばオセロ殿、土耳其の軍勢大舉して、サイブラスへ寄するとの事なるが、彼處の固めは、卿熟きょうじくと承知の筈、鎮守の代理總督が、適任の將官なることは、人皆の認むる所なれども、綸旨に等しき輿論の聲は、卿の赴任を冀ふ様子、就ては何卒卿には、新婚の慶事を斬きつ、は、つ、つつの騒ぎも、て、掩はんことの淺ましけれど、是非に領承せられよかし

オセ 戰場を家なる習慣は、楯を敷寝の箱枕も、毳毛の厚衾に變りませぬ、如何なる困難の其中にも、直ちに慰安を求むる某、オットマンとの戦争は、屹度引受申すてムらう、それに就き折入ての御願には、愚妻へ然るべき御準備を下し置かれ、相當の御待遇、御手當、また彼女が育ち柄に相應はしい住居と付人をば、何卒御配慮下さりますやう

公 父親方へ預け置ては如何ぢやな

アラ 其儀は御辭退仕りませう

オセ 某も其儀は

デス 妾も其儀は、朝夕面を見せましては、父の怒を誘う計り、殿下への御願には、妾が申條を何卒御聞取下されて、不束なる此身の願を、偏へに御贊助下さりませ

公 して和女が願とは

デス 何處迄も夫と共に、思ひ込みました此妾、思切て箇様な事を致します上は、世間へ憚ることもムりませぬ、妾の戀ひ慕ひましたは、夫の人物、夫の姿を其心中に見る妾、此身の精神と運命とを、投げ懸ましたも、夫が名譽、さては其勇敢なる氣象へてムります、その夫は戰場へ馳向ひての幾艱難、それに妻たる此妾は、後に残て榮華の益魚で暮しましては、契約の詮もなう、歸國待つ間の物うさは、嘸かしてムりませう、それ故何卒妾には、夫と同行致すやう、御許しなされて下さりませ

オセ 此儀は何卒御聞届下さりませ、方々、天も照覽せ、某がかく願ひまするは、さら／＼以て肉慾の渴をいやさむ爲めならず、又年甲斐もない若氣の熱情を満足させむ爲めでもなく、其他何にもせよ、少しも我慾

の爲めではムりませぬ、たゞ、彼女が優しい心の爲すがまゝに任  
さう爲め、さては某妻の側に在るの故をもて、身に負ふ此大任を怠る  
如き者と思召されな、はかなき戀の歡樂が、此心身を腐らして、身の職  
責を誤る如きことあらば、某が武運も末、頭に戴く此兜は、鍋ともなつ  
て臺所の隅に埋れもせよ、あらゆる災厄振懸り、汚名を被る法もあれ  
そは同伴せらるゝとも、せられぬとも、卿の心任せがよい、何はしかれ、  
國事は一刻も早くと迫る程に、急いで仕度を致さずばなるまい

驛甲 今夜にも御出立あらせられい

オセ 心得ました

公 明朝九時には、再び會議を開くであらう、オセ、殿部下を一人残しお  
かれい、改めての令狀や、官位格等何や彼やの傳達は、其者を以て送ら

せ申さむ

オセ 然らば旗手イアゴーは、正直律義の男故、愚妻の護送をも彼に任せ  
ますれば、後より御命じ下さるゝ必要の事共は、皆な彼に仰付け下さ  
りませ

公 然らば左様致すであらう、何れも、さらば——(アウに)これブラバンシ  
オ殿、徳は美を缺かずと申す上は、卿の婚殿が、肌が黒いとして仔細はな  
い、飛んだ美しい男であらうが

驛乙 さらば、ムール殿、デスデモナ殿を大切になされませ

アラ コレ、ムール、足下が眼の玉の黒い間は、女房に氣を付けたがよい、父  
をさへも瞞した女、足下とても瞞されぬものでもない

と公、驛官達、役人等退場

オセ 何のく、デスデモナの貞操は、命を賭しても保證致す、コレ、イアゴ  
 ー、デスデモナをば、屹度汝に預けるぞよ、汝が妻に冊かせ、善い機會を  
 見て、恙なく連て參れ、——ハテ、デスデモナ、此上は汝と睦じい浮世語  
 りも、はや束の間に迫りしぞや、時刻到れば、否應なしに、出立致さねば  
 ならぬ此身

とオセロ、デスデモナ退場

ロテ モシ、イアゴ殿

イア 何事ぢやな

ロテ 何う致したら、宜いてあらう

イア ハテ家へ歸て寝むが宜いてはないか

ロテ 此まゝ、入水でも致したい

イア 左様な事を致すなら、身共は足下を見限る計り、さてく阿房らし  
 い事ではある

ロテ 生存へ居るは苦痛と知りつゝ、生存へ居るこそ阿房らしい、苦痛を  
 癒やす其醫者は、死より外にないならば、死ねとの處方に不思議はム  
 らぬ

イア ヤレく情ない事ぢや、身共も二十八年來浮世を見て、損益の差別  
 が識別る様になつて以來、世間をかう見渡すに、自己を可愛がる方を  
 會得した男といふはないものぢやなア——身共などは、婦女子一匹  
 の爲めに、身を投げやうなど、云ふ程なら、人間を廢めて猿にてもな  
 る所存ぢや

ロテ ハテ何うしたら宜いてあらう、實に此様に、焦れて居るは耻辱であ



らう、乍去某には之を癒す力はない

イア 力も糸瓜もあるもので、かうするも彼アするも皆んな自分の意志から、豚軀が鳥なら、意志は則ち鳥作男、大根を植ゑうと、蒿莖を蒔かうと、午勞を殘さうと、胡蘿蔔を取去らうと、一種類を仕立てうと、多種類もて雜返さうと、但しは怠けて荒さうと、丹精して肥さうと、鳥を左右するは、鳥作男の方寸にある、人生といふ權衡は、一方が理屈、一方が肉慾でもつたもの、若し其理屈の一方が缺けたなら、人間の血性と劣情とは吾人を導いて、飛んだ終結へ陥すてムらう、幸に理屈といふものがあるに依て、燃る情熱、肉慾の刺撃、其外有ゆる心猿意馬の暴れ狂ふを綱に繋ぐ事も出来る、足下が戀ぢや色ぢやと騒ぐ其物は、草木で申せば、枝葉も枝葉、外界から持て來た接木の芽

ロテ イヤ、左様なものではムらぬ

イア イヤ、其戀こそは放縱な血の氣の凝結で、意志の罣で制へぬ故に出來たもの、サア、男らしくするがよい、猫の兒や盲目の狗兒ではあるまいし、入水して死ぬとは何事ぢや、足下の腹心と契つた身共、切ても切れぬ罣で、かく足下に繋がる上は、足下故に一骨折るは、今を措て他時にはない、財布に金を詰め込んで、附帯して顔を更へ、此度の戦争に従軍せられぬ、繰返して申すが、財布に金を詰め込んでぢや、あのデスデモナが何時迄も、ムールを慕つて居られう道理がない——財布に金を忘れぬやう——ムールとても同じ事、此戀の始りが、激しかった其割に女の方での他口も屹度激しい事でムらう、何がさて財布に金が專一專一、えてムール人と申すは、意志の變り易いもの——財布に金を忘

れまい——今こそ彼奴が口に甘しと思ふ食物も、苦くなるは瞬く間、  
女の方でも、若い男が欲しうなるは火を賭るやう、ムールと二人居並  
んで、熟々考へて見たならば、とんだ婚選びをしたものと、悟る事もあ  
るであらう、イヤ是非さうあらねばならぬ筈、ぢやに依て財布に金を  
詰込みめされい、どうせ思切つた事を致すなら、入水などより、もつと  
氣のきいた事を致すがよい、ハテ出来る丈の金を才覚するのぢや、行  
衛定めぬ野蠻人と、高尚なエニスの子との其中に、云替した其契り  
が、何のどれ程固からう、身共が知慧の有丈と、地獄から借る悪魔の力  
で、破ることが出来るなら、ハテ女は足下が掌中の物、金を才覚せいと  
はこの事、入水は思留るがよい、何の益にも立たぬ事だ、思ふ女を手  
にも入れずに死なうより、望を叶へて、縊らるゝ方が當世といふもの

ロテ 然らば成行を待て居る程に、屹度某の爲めに計つて下さるか

イナ 氣遣には及ばぬ事、先づ金を才覚なされい——これ迄度々申した  
が、其上にも反覆し申す様に、身共は、ムールが大嫌ひ、其理由は心の底  
の底迄深く沁て居る、足下とても同じ事、此上は協心同力、復讐を致し  
て遣りたい、足下が首尾克く、彼奴の額に角を生して遣るならば、足下  
にはおたのしみ、身共にも善いなぐさみ、時といふ腹からは、種々の事  
が生るゝもの、いざ／＼さらば、金の才覚に出懸なされ、明朝又相談を  
致すと致さう、おさらば

ロテ して明朝は何處にて

イナ 某の宿處と致さう

ロテ 然らば早朝御尋ね申さう(と出行かむとす  
るをイナ呼留め)

イア おさらば——イヤ、ロデリゴー、一寸一言

ロデ 何でムる

イア 入水は愈よ廢止さうといふ氣になられたか

ロデ 某は全く腹を變へました此上は急ぎ田地を賣却なし、金子才覺致  
すてムらう

イア さらばずつしり、財布を膨脹まして置くがよい

とロデリゴー退場

イア かう世の中の痴漢奴は、みんな乃公の金箱だ、自分の娛樂と利益を  
外にして、彼を痴漢を片相手に、貴重な時を費したなら、乃公の智慧に  
對しても、知慧冥加に外れると申すもの、我が嫌ひは彼のムール、乃公  
の閨房を辱かしたと、世間の取沙汰は信れぬが、よし嫌疑にもせよ、

事實にもせよ、其まゝには濟されぬ、幸ひオセロは乃公を信じて居れ  
ば、仕事の都合は詭ひ向、カツシオは好男兒、おゝそれ、彼奴の役を  
横取して、日頃の願望を叶へたなら、それを眞の兩天秤、さて其計略は  
どうしたもの——おゝ、好い機會を見計らひ、カツシオがデスデモナ  
と、餘り親しうして居るはと、そろくムールの耳に毒を注せば、容貌  
から舉動迄、女殺しと出来た男、嫌疑を惹くは疑なし、それにムールは  
馬鹿正直、人間といふものは、見懸通りに、皆な正直と心得居て、鼻端の  
先で從順く、引廻される驢馬のやう——おゝさうぢや、隱謀の種子は  
既う蒔いた、此上の仕事には、地獄から借る惡魔の力と、闇夜の邪氣で  
密々に、二葉に仕立て上げずばなるまい

と退場

第二幕

第一場——サイプラス島海岸の一市 阜頭附

近の廣場

モ・ン・タノ、及び紳士二人登場

モ・ン  
タノ 彼なる岬の沖の方に何か見ゆるものはムらぬか

甲 紳士 何もムリませぬ潮の高く躍る計り空と海との境にも白帆一つ見

えませぬ

モ・ン 陸では酷い大嵐あのやうに城の狭間を揺すりし例は聞いた事も  
ムらぬが海でもあの通りであつたなら山と崩るゝ高浪に、いかな程  
の木の肋骨も(取船)碎けずには居られまい何の様な事が起りはせま

いか

紳乙 定めて土耳其艦隊は、ちり／＼ばらく／＼でムリませう、浪打際に立  
て居れば、逆巻く浪は雲を衝くかと疑はれ、高く長く恐ろしい髪(たてかみ)のや  
うな形して、推寄せ行くを見る時は、さらめく北斗を浴せかけ、周囲の  
小星の光は今、あはや消えむと思ふばかりでムりました、箇様に凄  
海上の有様は、嘗て見た事もムリませぬ

モ・ン いかにも土耳其艦隊、何處の港へも隠れずに、嵐に暴(あまた)され居たなら  
ば、沈没の難はえ遁れまい、あれを持堪へられう道理はない

紳丙 吉報が参りました、戦は終結此大嵐で土耳其の野心は水の泡、彼等  
艦隊の大概は、難船破船、目も當てられぬ有様と、今着いたゼニスの船  
が、現場を見て來ての噂でムる

モン 何とそれは眞實でムるか

神丙 ゼロナの港(管轄地)を解纜したる船一艘只今着港、彼勇敢の聞え  
高きオセロが副官、ミカエル、カツシオと申す者が参られました、オセ  
ロが乗船はまだ着港に及ばねど、彼は此度此島の總督に任ぜられ、そ  
れて参られるとの事でムる

モン それは某も喜ばしい、彼ならば屈覚の總督ぢや

神丙 乍去副官カツシオも、敵艦の敗滅は喜びながら、オセロ殿の身の上  
が何うなられたかと、驚き切て居られます、あの嵐に吹分られて、互  
に消息知らぬとの事

モン 何卒無事にしたいのぢや、當初某も、彼が部下に居たことがムる  
が、實に名將とは彼が事、イザ、海岸へ参て、入港の船をも見、又勇敢

なるオセロの乗船が、沖の方に見ゆるかどうか、海と空との區別さへ、  
見分かぬ程になる迄も、眼を見張て見詰めませう

神丙 さらば皆々諸共に、かういふ中も、後からくと、入港の船が心懸り

カツシオ登場

シカツ 當サイブラスの天晴干城たるモンタノ殿、ムール殿を左様にお褒  
め下さるとは、有難い事でムります、危き海上にて、見失ひたる彼が身  
の上、願はくは、吳天も風波を退け、御擁護あらむことを祈ります

モン 御船は堅固でムりませうな

カツ いかにも御船は堅牢、水先案内は、人も許せし其道の達人、夫故某も  
至て心強く覺えます

と此時奥にて「帆影がくく」といふ聲聞ゆる

丁紳士登場

カッ 彼の騒ぎは

紳丁 市中は空虚、市民は海岸に總出にて、アレあの通り帆影々々と叫びます

カッ どうやら其船はオセロ殿の

と此時砲聲聞ゆる

紳乙 あれは船より打出す禮砲の響、何れ味方の船に相違はムらぬ

カッ 何卒早う往て到着なせしは何人なるか、確めて來て下されい

紳乙 畏まりました

と退場

モン それはさうと副官殿、大將には、はや奥方をお持なされましたか

カッ いかにもお仕合せと、若い奥方をお持ちなされました、それはその美しさは物語の美女は愚か、筆舌の盡す所ではムりませぬ、如何な畫工も筆を棄て、如何な詩人の空想も及びもムらぬ

乙紳士再登場

して着港なしたる其人は

紳 大將の旗手にて、イアゴーと申す仁でムります

カッ それは大層早うムつた、道がの暴風波浪、さては暗礁沙洲など、船の強敵も、美といふ觀念はあるかして、デスデモナ殿の乗船には、其残忍の性を藏して、無事に過らしめたものと見える

モン デスデモナと仰せらるゝは

カッ 即ち只今御話申せし、大將殿の北の方、イアゴーと申す者こそ、其御

扈從ついででムりますが、思ひしより七日も早くお着つなされました。此上は  
 大デヨブ神、オセロ殿を御擁護あり、神かみながらの氣息いきをもて、御乗船の  
 帆をはらませ、少しも早う、其大艦の姿を見せ、此港を奪うばんぜしめ、デス  
 デモナ殿の腕うでには戀の喘あせぎを抱かかりしめ、我等が沈んだ元氣には、復活  
 の火を點ともじつゝ、サイブラス全島の慰藉を贈らせ給ふ様祈いのるばかり  
 でムります。

デス デモナ、エミリア、イアゴ、ロテリゴ、及び従者大勢、登場

お、御覽あれ積たかんで参つた寶物たからは、早や荷上おんかみが濟なりました（デスは上陸  
 の意）サイブラスの人々達さ、お下に居ゐられませい——これは夫  
 人御無事で祝着がねに存ぞんじます。昊天の御恵み、尙ほ此上にも貴女あなたの行  
 先、前後左右に降くだりかゝり、及ばぬ限かぎもないやうに祈いのります。

デス 忝かたじけなうムります。カッシオ様、して我夫わがみの御行衛ごぎやうゑは

カッ まだ御到着遊あそばしませねば、如何いかおはすやら存ぞんじませぬが、必ず追  
 付つ御無事で御入港遊あそばす事でムりませう

デス ても氣掛きかりな事ではある——何なにうして卿きみとは離わかれ——

カッ 彼の暴風あつめに吹分ふけられ、激浪げきろうに隔へてられ——ハテお聞きなされ彼の

聲こゑは

奥おくにて、帆影ほかげが——といふ聲こゑに引續ひきつて發砲はつぱうの音聞きゆる

紳乙 城砦とりでへの禮砲らいぱうでムります、又もや味方あかの船ふねが入港いりこう致いたしたと見えま  
 する

カッ 急いそぎ御聞き糺ただし下くだされい

と乙紳士退場

イヤ、イアゴ一殿、御苦勞てムった——(アに向ヒ)これは令聞、よろこそ御出(接吻シナカラ)イヤゴ一殿御免あれ、幼少よりの習得にて、憚りもなうかやうに致さねば、氣が濟まぬが某の作法てムる

イヤ イヤ某には舌の留度もない程、しつこく饒舌べる女てムりますが、其舌數程貴殿に唇を御許し申したなら、いかな貴殿も堪能なさらう

アス そのやうな事を、至て口數の少ないエミリア

イヤ どう致しまして多過ぎて困り入ります、某が眠い——と思ふ時ても、容赦もない長談義、去りながら奥方、心中に何事か思ふことがムる時は、それを口に出さぬだけは、いかさま寡言でムります、心て人を輕蔑する癖者

エミ そのやうな事、此身に云はれる記應はない

イヤ ヤイ、外へ行けば、繪にかいたお姫様客間へ出れば、鈴のやうな作り聲、それて居ながら、臺所では野猫のやうにいがみつけ、悪戯を爲た時の如菩薩顔、怒った時の如夜叉面、仕事に懸て能く遊び、寢室へ退むて能く稼ぐ

アス 悪口ばかり、ちとたしなむだがよいわいの

イヤ 眞實を申すのでムります、若しこれが違つたなら、如何なる御蔑視ても受けませう、ヤイ、エミリア、起て遊び、寝て稼ぐとは、汝が事ぢやな

エミ 女房の讃附は止して下され

イヤ おゝ、定めて耳が痛からう

アス 若し此妾に讃を付けやうならどのやうなことを云やるかや

イヤ 奥方それは御免下されませ、悪口の外には何も知らぬ男てムりま



す

デス 大事な、云うて見や——誰ぞ埠頭へ往ったかいなう

イア 参つた者がムります

デス 妾はちつとも面白い事はないけれど、面白さうに見せ懸て、自分で自分を紛らして居るのぢやわいな——さア——妾の贖附は

と是よりイアゴ一輕口交りに様々の女の贖附をすること

あり、デステ聞き終りて一杯食はされたといふ風情

デス 喃エミリア、汝の夫ではあるけれど、最早何も聞くまいぞや——カ

ツシオ様、ほんに口の悪い、何にも構はぬ男ではムりませぬか

九ツ 實に——詞の露骨な男でムります、いや其様な事をお聞きなされうより、戦争の事でも、お聞きなされたが、お慰みてムりませう

とカツシオ、デステモナの手を取り、熱しく挨拶する

イア (旁) 彼様ことを云ひながら、奥方の掌を弄うて居る、ようこそ——囁

き話、其様な舉動を蛛網にして、カツシオ如き圖大な蜻蛉を捉へるは、

乃公が御手の物——ウム、今度は笑ひかける、よい——其得意の禮義

を鎖に使用して、今に貴様を縛つて呉れるわけに——貴様のいふ通り、乃公

は兵法に長て居る、副官といふ貴様の役目は、其禮義で奪て遣す程に、

貴公子氣取の其三指の接吻は、いづれ後悔の種であらう (貴婦人の前にて三指を

接吻するは當時の) イヤ、よい——ようこそ——其接吻、此上もない作法

そりや又唇へ三指ぢや、貴様の爲めには、寧ろ、汝瓶の口でも啣へたが

優だらうに—— (此時喇叭の) や、ムール殿ぢや、彼こそたしかに閣下の

喇叭

カツ いかにも左様でムらう。

デス そんなら早くお出迎を

カツ それ其處へお出遊ばしました

オセロ及従者退登場

オセ おゝ美しの女武者

デス 懐かしのオセロ殿

オセ 汝に今此處で逢はうとは、喜悅と驚愕が等分ぢや、おゝ心から嬉し  
いぞ、嵐の後の長閑さが、何時も箇様であるならば、吹けよ嵐、狂へよ嵐、  
死人の眠を覺さむ迄も、沖漕ぐ船は、忽ち天上に揺り上げられ、忽ち奈  
儘落の底に落つるかと思ゆる斗りに揉まれもせよ、おゝ嬉しや、寧ろ  
此今死なば、之に増す幸やある、行衛もわかぬ將來に、此程のたのしさ

が又あるべしとも思はれね程、心の中に充つる悦喜

デス そんな縁喜でもない事を、二人が中のたのしみは、月日と共に積る  
計りに致したうムります

オセ 何卒其様にしたいもの、胸に溢るゝ此嬉しさ、云表はさむ言葉もな  
い、いでゝ此れが(ながら)二人の中の、たゞ一つのもつれあひ

イア (自勞)おゝ今こそ其の様に琴瑟調和、纏て不調和を入れて呉れるは、正  
直な乃公の方寸に在る

オセ いざゝ入城致すと致さう――これゝ人々、戦争は早や鎮まつ  
て、土耳其の軍勢は皆溺没――さるにても此島なる舊知の人々は如  
何致せし、何れも拙者を痛う愛し呉れたれば、汝とても、屹度款待せら  
るゝてあらう、おゝデスデモナ、拙者は悦喜の餘り取亂して、色々の事

を申したな——イアゴー、大儀なから、港へ參て手荷物を揚て呉りやれ、そして船長をば、城内へ案内致して置きやれ、誠に善い人物なれば、随分疎略のないやうに待遇すが宜い——コレ、デスデモナ、返すくも嬉しい出遇を致したな

とイアゴー及びロアゴーの外一同退場

イア これロドリゴー、後刻港で出會うと致さうが、先づく此方へ——世話にも戀すれば、生れもつかぬ、天晴な氣象が出ると申せば、足下とても同様と心得るが、果して然らば身共が申す所をお聞あれ、彼のそれ副官にはな、今夜警固の場にて、徹夜番をせらるゝ筈、イヤ其前に話して置くべき一事は、デスデモナは近頃彼奴に首丈——

ロア 何、あのカツシオに、まさか其様な事は

イア ハテ黙つてよう合點の參るやうに聞くがよい、荒唐無稽な一場の法螺故に、彼の逆上方を考へて見るがよい、實のない法螺計かりて、何時迄惚れて居られやう、足下の胸にそれが判らぬ筈はない、デスデモナちやとて、眼に保養をさせいで、然るにあのムールの畜生面を見て居るが何の保養情の血といふものが、一通りの歡樂にも倦み果て、だるく鈍くなつた其時は、火を入れて新たな情慾を起さう爲に、男の顔の可愛らしさ、年頃の似合はしき、又相應はしい心榮やら相貌やらが入用となる、ムールにはそれが無い、其入用品の拂底から、女心は樂まない、次第に倦怠が來て、ムール奴が厭になる、これは自然の人情がさする業で、果は二度目の夫定め——サア是丈の前置は、無理のない免れぬ推察、さて其上で考ふるに、足下が野心の前途に立ちだか

て邪魔ひろく奴原の第一番は彼のカッショを除いて誰あらう、油断のならぬ男なれば、賢者顔して、然つべらしう粧へども、胸に一物、燃ゆる情慾の願望を叶へむとの心計り、機會さへあらばと、鵜の目鷹の目、來もせぬ果報などは待て居ず、我から果報を作り出すといふ、箸にも棒にもかゝらぬ奴、搦てゝ加へて、男は美し年は若し、生心付いた、年端のゆかぬ娘などに、好かれさうな柄にさへ出來て居る、されば彼のデスデモナも疾くから彼奴に目星を付けた

ロテ どうも彼の女に其様な事があらうとは、優にやさしい彼の女に

イア 優にやさしいとは何の事、彼女とても同じ葡萄の酒を飲む女、優にやさしい女なら、ムールにも惚れはしまし、遂先刻も、男の手をぢっとしめ、掌を弄り合ふたが、足下の眼には留まらぬか

ロテ それは某も見届けたが、あれば禮義作法といふもの

イア イヤ、あれは色事と申すもの、不義な戀慕の曖昧な序開き、あの囁き合ふた口と口、吐く息も、揃み合ふ程、實に大それた淫行ではある、コレ、ロテリゴ、筒様に雙方から熱り合ふて見れば、愈よ實事となつて、戀物語の本文に入るも、真近の中ぢやが——乍去何事も、身共の指圖に任せて呉れい、どうせ、エニスから足下を連出したも、身共ではないか、ぢやに由て、差當り今夜は足下も警固に出るがよい、其後の事は、身共からよきやうに指圖を致すと致さう、カッショが足下を知らぬは幸ひ、身共は見え隠れに足下の側を離れまい、足下は何でも、折がな、高聲を發し、若くは彼が家來共を罵り、さては、臨機應變の手段にて、いかにもしてカッショを怒らす様に致すがよい

ロテ 成る程

イア 彼奴性急者の怒り易い性分で、足下を打擲も致し兼ねぬが、わざと其様に持懸けいすりや身共の計略で、サイプラスの人民を煽ぎ立て、カッシオを追放せぬ中は、鎮まらぬ様に計らはう、彼奴既になき上は、前途を塞ぐ一大障碍は、首尾克く除けたと申すもの、其後の計略は又其時の事と致さう、さてこそ足下が願ふ所への道程も餘程近くなるといふもの

ロテ 巧くさへ行く事なら、いかにも、其様に致して見やう

イア そこは拙者が保證致す、何れ後刻營所にて又御意得ると致さうか、身共は大将の旅行行李を、是から陸揚致す所、さらば

ロテ さらば後刻

とロテ退場

イア (白)あのカッシオがデステモナに戀着て居るは紛れもない、彼女がカッシオに惚印といふもあり、そんな事、乃公は嫌だが、ムール奴は確然とした罪のない立派な男、デステモナの爲めには、又とない好い良人でもあらうか、何を隠さう、乃公も彼女を少々慕つて居るといふのは、全くの好色心からでもない、何の道邪淫の罪は道れねど、どうもオセロが乃公の閨房を暴したらしい、と疑へば何とやら、嚙下した激薬に、臟腑を嚙まれる心持、其堪へ難き苦みの報酬せうの心から、我妻を取られた代りに、人妻に疵をつけて、雙方平均になる迄は、此の魂が承知せぬ、よし失敗つても、如何な理屈も癒やされぬ、嫉妬といふ心の苦痛を興へて止まらうや、此目論見て、エニスから連て來た彼の瘡狗(デロ)

リゴ)を嗾しかけて、程よく操つて置く上は、ミカエル、カツシオは思ふがまゝ、彼奴もどうやら迂散臭い様でもある故、何ぞムールに取留もない讒言をして追拂はせ、ムールには恩を被せ、乃公を善い者に思はせて、ずつしり褒美を取てやらう、ても馬鹿を見るのは彼のムール、さしも安穩で過せる身を、狂亂の躰に仕立て、遣るのか、イヤ何事も此胸の中に混沌として潜んで居る、悪事の姿は仕立て、見ねば見えぬものぢや

と退場

### 第二場 街上

傳令使布令を宣へながら登場、人民大勢従ひゆく

傳 我が尊敬すべき、勇敢無比の大將軍オセロ殿の御意で、只今土耳其艦隊全滅の確報ありしにつき、各隨意の祝賀を致され、或は舞踏或は烟火、其外面々の好みに應じて、如何なる遊戯宴酒たりとも、存分に致すが宜い、これは勝利を祝ふ計りてなく、オセロ殿が新婚の披露をも兼ねての事、大將の御意は右の通り、城内の各室、人民の出入勝手たるべし、只今五時より十一時の振鈴迄、酒宴遊興思ふ儘に致され、天よサイブラスの島に幸せよ、神よ名將オセロ殿が身の上を護らせ給へ

と退場

第三場 城内の書院

オセロ、デスマモナ、カツシオ侍者大勢登場

オセ ミカエル殿今夜は警護の者共を取締つて下されい、いかに祝勝の宴なればとて、互に餘り遊興の度は過ぎぬが宜しからう

カツ 萬事イアゴーが心得居る筈でムリですが、尙ほ其上に某も、自身取締を致すてムリませう

オセ イアゴーはほんに正直者、さらば御免あれミカエル殿、明朝早々都合次第でちと話したい事がムる——(デスマモナに)いざ、デスマモナ、新調の品物を樂むは是からぢや、さてやがて二人が中に、利子を生むこともあるであらう、さらば

とオセ、デスマ、及侍者一同退場、イアゴー登場

カツ ようこそイアゴー、最早警固に出ずばなるまい

イア いや副官、まだ十時にもなりませぬに、今直ぐ出懸けるにも及びませぬ、大將には奥方が戀しいので、早々と我等を置去になされたが、いかさまそれも御尤の事、まだとら／＼一晩も、御一緒に御過ごしなされた事もなし、それに奥方はあの通り、人間の者には惜しい程の美しさ

カツ 實に優秀の美人でムるな

イア そして風流の嗜みにも乏しからぬ御様子

カツ いかにも蕭洒した華奢な性

イア 彼の御目附がどうも云はれませぬ、彼のお目が物云うて、男に挑み

かけるかと思はれます

カッ 成る程人を招いて居るやうな美しい御目ぢやが、それて極柔順し  
いやさしい眼

イア そして口を開けば、戀の御用心と云はねばかりの其嬌音

カッ 實にあれは完全な美人でムる。

イア 御二方の閨房萬歳を祈りませう——それはさうと副官、こゝに葡  
萄酒が一瓶ムる、それにサイブラスの酒落者共が、是非オセロ殿の健  
康を祝せむ爲め一献酌み替はしたいと、彼方に待つて居ります

カッ 今夜は御免蒙らう、悲しい事に某は、少々酒を過すと直ぐ腦が亂れ  
て來る豫て酒の代りに、何か禮法を破らぬやうな御馳走がありさう  
なものと冀つて居る位

イア ぢやと申して、彼等は何れも某が入懇の者、たゞ一盞で宜しうムり  
ます、お助太刀は某が致しませう

カッ 某が今夜飲んだはたつた一杯、それも密と水を割つたのぢやが、見られ  
よ此通りの顔色、酒量の弱いには困却、此上一滴たりとも口に入  
れて、見悪い躰を見せたらうない

イア 大丈夫の御身としてそのやうな弱い事を、祝勝會ではムりませぬ  
か、それにもだしがたい人々の願

カッ してその人々は何處に

イア 遂扉の外に待つて居ります、御手づから御案内下されば、此上の事  
はムりませぬ

カッ 然らば呼んで參らう、乍去迷惑の事ではある



と退場

イア 最早餘程まゐつた様子、此上一杯強いつけたら、御姫様が御寵愛の矮狗といふ格で、吠えつき噛みつき、嘸騒がしくなるであらう、そこへ持つて来て、あの薄鈍のロデリゴは、戀て性根も何處へやら、殊にデスデモナの健康を祝すとかで、今頃は圖部六であらうに、その男も番に立つ、それにあのサイブラスの三人の若者……彼奴等はいやに高慢ちきて、見識を高い處にぶら下て居る、謂はゞ此喧嘩好の島國の生粹、それを己が強いつけて、どろんげんにしてあるが、彼等も番に立つといふ、どれもこれも酔淡の向ふ見ず、其中へ彼のカッシオを突放して、宜い様に突いて遣り、何か此島人の感情を害する様な騒動を起させて呉れう——さういふ中に來たぞ、思ふ通りにいささへすれ

ば、風は追風潮流はよし、先づ船頭は安心といふもの

カッシオ、モンタノ及び其他の紳士と共に登場、召使共酒道具を携へ後より出来る

カッ 實以て某は、既や此通りの大酩酊

モン イヤ小さいのでたつた一盞、澤山とは申しませぬ、軍人に虚言はムらぬ

イア コレ、酒ぢや、(と云ひながら)

盞を鳴らせや、鳴らせ、チンカラリ、鳴らせや、鳴らせ、盞を、戰爭する身も同じ、人命は夢ぢや、夢の間よ、さゝ酒でもあがらんせ

サア、酒ぢや、

カッ これは、愉快な唄

イア これは英吉利で覺えた唄でムりますが、いや英吉利人は酒が強う  
ムります、デンマーク人が飲むの、日耳曼人が飲むの、又は布袋ハコツ腹ハラの  
和蘭人が強いのと申したとて、英吉利人に比ぶれば何でもムりませ  
ぬ

カッ 英吉利人は飲むことにかけては左様に上手でムるかな

イア 丁抹チマの飲酒家ウケなどは、何の雜作もなく盛潰し、汗一滴流さず、日  
耳曼人を酔ひこかし、瞬ヒトく中に和蘭人に小間物店を出させます

カッ 大將殿の健康を祝さうてはムりませぬか

モン 某も御同意でムる、副官殿、イザ頂戴致さう

イア お、懐かしの英蘭エングランド（と又鼻唄）

唄「ステブン王はよい王様、御召の洋袴ズボンが「クラオン」それでも少々高

價カいとて仕立屋御叱責頂戴し

王様でさへ其通り、それにお前は小身者、國の亡ぶも驕傲故、古い衣

物で我慢しなく

コラ、酒ぢや、

カッ これは又前のよりも、一段と面白い

イア も一度御所望でムりますか

カッ （既や酔潰れたる）不要々々、彼奴其様な事を致すとは、己が身分をも

省みぬ奴ぢや、はて神は萬人の上に在り、神助に預るやうに定つて居  
る人もあれば、預ることの出来ぬやうに極つて居る人もあり

イヤ 仰せの通りで副官

カッ そこで某自身はと申すに——大將殿や其外高貴の人を差措いて、

無禮の段は御容赦——先づ神助に預らうと思ひ居る

イア 某なども矢張り御同様の考て

カツ 乍憚、それは某の方が先ぢや、副官が旗手に先をずるは順序といふもの、イヤもうこれて宜い解つた、これより勤務に取掛らう——神よ我等が罪を宥させ給へ——サア方々勤務に就かうてはムらぬか、某は酔うては居りませぬぞ、こゝに居るのは旗手、此方が右の手、此方が左手、どうぢや、酔うては居りますまいが、此通り確乎立つ事も出来れば、はつきり喋舌る事も出来ませぬわい

一同 其通りてムります

カツ ハテ然らばそれで宜しい、假りにも某が酔うてるなど、考へめさぬが宜しい

とカツシオ退場

モン 然らば諸君見張場へ警固に参るてムらう

イア 閣下には副官が只今の舉動に御目留められましたか、古シイザの幕下に屬して、三軍を指揮するとても、やわか仕損じは致さぬ程の武官でムるが、只だ彼一つの癖がムる故、善悪等分イヤ氣の毒な事てムります、それにオセロ殿の厚い御信用もある事故、ひよと彼の癖が起つた時、此島にとんだ騒動でも起さねば宜いがと、それが何より案じられてなりませぬ

モン はてそれは度々の事てムるかな

イア 酔うて眠る前には、必ずあの序幕がムります、醒てさへ居られたら、一晝夜でも身動もせず、ちやんとして居らるる仁てムりますが

モン それは豫め、大將に注意して置きたいものぢや、恐らく大將はそれを御存じあるまい、彼の通りの善い御方なれば、カツシオが性質の善い所ばかりを取て、悪い處はまだ知らぬ、どうぢや左様ではムらぬか

ロドリゴ一登場

イア (ロアに向ひ) コレサ、ロドリゴ一、副官の後を追うた

と是にてロア退場

モン あの結構なムール殿が、己れに次げる大役を、左様な悪癖ある危険な人物に托し置くとは、こりや如何にも氣の毒ぢや、密まぎと此事を告げて置くのは、却て潔白な所業でムるぞ

イア それは此美しい島一國に代へましても、某には出来ませぬ、某はカツシオをば、心から愛して居ります程に、それよりは今の中、あの悪癖

を改めさずる様に致したうります、や、御聞きあれあの騒ぎは

と奥にて「助けて呉れ」と叫ぶ聲聞ゆる、同時にカツシオ、

ロドリゴ一を道ひながら登場

カツ 此奴が

モン 何事なるぞ副官

カツ 身共に向て要らざる差圖立を致した奴、打て、打ちのめし、海鼠うしこのやうにせにや、措かぬ

ロア 何打つ、何の

カツ まだぬかし居るか、此馬鹿めが

とカツシオ、ロアを打つ

モン これさ副官、先づく此手をお離しなされ

カツ 打棄て置きめされ、それよりか頭の臚ても、割られぬやうに用心を  
するがい、

モン コレ、貴殿は酔うてゐる

カツ 何酔うてると

とモンタノに打てかゝる

イア (口々に呼) 彼方へ、早う構外へ出て、騒動くと叫んだく、

とロテ退場

副官殿これはしたり、誰人ぞ早く御助け下され——副官殿——モン  
タノ様——申し方々——イヤ、ハヤこれはとんだよい警固ぢやわい

と警鐘の音聞ゆる

や、あの鐘の音は——南無三、市民の眠を覺すてあらう、これを副官、

あよしなされ恥辱てゐるぞ

オセロ侍者を引連れ再登場

オセ 何事なるぞ

モン 御覽あれ此通りの出血某は重傷を被りました

オセ 止せ、コレ、じだばた致すと命はないぞ

イア あよしなされ副官——モンタノ殿、コレサ御兩人——場所と御役  
目をお忘れなされましたか、大將殿よりの御詞でゐる、あよしなされ  
と申すに、御名譽に拘ります

オセ 如何なれば箇様の椿事が起りしぞ、さては我等は下賤の者となり  
下り、土耳古人にさへ天も禁め給ひたる、同士撃をばし始めしか、基督  
信者といふ名に對しても、さもししい争ひはよしませい、己が私憤を漏

さむなど、妄りに物騒な舉動を致す者は、一命を疎末に致すと申すもの、一いさまきで首はないぞ——警鐘留めい、島中を騒がすであらうに——でも方々、そもく此は何事でムる——お、汝はイヤゴ、正直者、いたう心配氣に見受るが此騒動は誰が始めた、包まず語つて聞かせよ、拙者が命令ぢやぞや

イア 某は一向に存じませぬ、お二人共遂今の今迄お睦まじく、新夫婦が今お床入といふ風で入らせられましたに、いかなる星の祟てか、俄に變る空模様刃物が飛出す斬つ、撃つ、の脛さ騒ぎ、譯もない喧嘩の初めといふは、どういふ次第か申されませぬ、こんな事を見る爲めに、某をば此處迄運び参りたる、二本の脛が恨めしい、寧ろ名譽ある戰場で失ひましたらばと存ずる位

オセ ミカエル殿事の起源は何とてあるぞ、我身の程を忘られたか

カツ 何卒御容赦下さりませ、某は申上る詞もムりませぬ

オセ モンタノ殿、貴殿は日來禮節を旨とし給ふ御習性、まだ御若年の砌には、沈着温雅の譽高く、御名は既に心ある人々の口々に稱へられしに、今其二なき名譽を傷け、喧嘩買の汚名を取らせ給ふは如何なる次第、御返辭が承りたい

モン 賢明なるオセロ殿、某は重傷を負ひましてムる、萬更御答の出来ぬでもムらぬが、只今はどうも痛ましくて申上兼ますれば、イヤゴ殿より御聞取下されい、乍去、自愛といふ事が時として悪事であり、又狂耨者に對する正當防衛が犯罪であるならば、いざ知らず、さらば今夜某が一言一行の端にだに、過失ありしとは存じませぬ。

オセ 情激し威昂たかぶり、理非の分別も何處へやら、憤怒の導くに任ずる此身、これ此軀からだ軀なが搖ゆぎ出で此拳こぶしが飛んだら最期、何奴どいつ此奴こいつの容赦ゆるみはないぞ、早や〜事の次第を白狀致せ、事を始めた其者は、設令拙者うしろが存たもの同胞どうぼうなればとて庇かばは致さぬ、戰場せんじやうたらむず土地の習ひ、まだ人民は戦々競々、そを安んぜむが爲め、まつた市中に事なからしめん其爲めに、わざ〜設けし警固けいこの場ばの此夜深に、言語同斷げんごどうだんの所業、思ふも口惜し——イアゴ、事の起源は何にてあるぞ

モン 私情の爲めに搦なまれてか、職責しやくせきの上から憚おそつてか、若し少々でも事實を曲げたら、イアゴ、殿貴殿の武士は廢すたらうぞ

イア 其様にお責めなされるな、カッショ殿の御不利ごふり益えきを此舌こゝろで喋しゃべらうよ、寧なぞ引抜いて切て捨てたら、ムります、乍去あは、有様ありさまを其儘まま申すのは、決

して人様悪しかれと思ふ譯ではムりませぬ故、知り居る丈を申しませう、箇様このようでムる御聞下され、モンタノ殿と某と談話を致し居る所へ、助けて呉れと叫びながら、一人の男が逃げて参りし其後より、カッショ殿が抜刀ぬきかたをかざし、追駆おして参られました、其時これなるモンタノ殿、其中へ割て入り、暫く〜と御控へなされる、某は亦其男の恐ろしい叫聲こゝろが、市中を騒がしは致すまいかと、後から追駆おして参りましたが、素早すみい奴でとう〜逃げられ、たゆたふ所へ太刀打つ物音、遂に聞いた事も、ない、カッショ殿の斬るぞ殺すぞとのけた、ましい叫び聲に、急ぎ取て還して来て見ますれば、斬きつ撃うつの眞最中、閣下御手づから御引分なされた時も、其通りでムりました、某が存じ居るはたゞ是丈、乍去あは人間は人間だけ、いかな賢者けんじやでも過失あやまといふはムります、憤然ふんぜんとした時

には幸あれと思ふ親友をも思はず打つ事はある習ひ、カツシオ殿が彼の男を追駈られましたは、必ず忍ぶに忍ばれぬ程の罵詈謗を御受けなされたからてムリませう

オセ あいや、イアゴ、それは其方が正直な心と、カツシオを疵ふの心から、事を小さくして、罪を軽くせうと思ふのであらう——コレ、カツシオ、拙者が足下を愛する心は變らねど、今から役目を取上たぞ、左様心得めされい

アスアモナ侍女を連れ登場

見られい、女共さへ此騒ぎに起きて参つた、是も畢竟餘の者への見せしめぞや

アス 何事でムります

オセ いや最早何事も無い、早やう寢所へ戻るが宜い——モンタノ殿御

負傷は某が自身療治を致して進ぜます、それ者共御手を引て

と侍者モンタノを扶けて退場

イアゴ、其方は市中に心を配り、此騒動で驚かされた人心を鎮めて置け——さらばデスデモナ、武夫の習ひ、太刀打の音で熟眠を破らるゝは常の事ぢやわ

とカツシオ、イアゴの外一同退場

イア 副官殿、御怪我をなされたか

カツ 最早如何なる療治も叶はぬ程

イヤ これはしたり、飛んだ事を

カツ 怪我といふは名譽、名譽、名譽ぢや、某は名譽を失ひはてた、いや、某が



一身は不朽の部分が失なつて、残るは五尺の形骸ばかり、イアゴ、實に名譽は惜しいよな

イア　いや某は何處ぞ御身躰にお怪我をなされたやうに思ひましたが、名譽と違ひお身躰は大切、何の名譽と申すは取留もない實もないもの、自分の心でさへ左様のものは失さぬとして置けば、決して失しは致しませぬ、ハテ大將のお機嫌を取直す方は幾らもムる、大將とても實御憎しみからでなく、全くの政略から、只だ一時の御懲罰、罪なき犬を打据えて、暴れ獅子を誠むるやうなものでムりませう、御詫をなされませ、御許容は目の前ぢや

カッ　いや彼の様に結構な大將を、此様な不確實な酒癖の悪い粗忽しい副官で瞞着さうよりは、寧ろ御排斥あるやうに御頼ひ申さう、飲んだ

くれて、取留もない口をさし、喧嘩口論罵詈譎、己が影法師を捉へての大悶着——お、眼に見えぬ酒の精に、定まった名がないならば、悪魔といふ名を命付けて興りたい

イア　して副官が抜刀で追駆なされた彼の男は、何者でムりました、何事を致しました

カッ　某は少しも存せぬ

イア　左様な事がムりませうや

カッ　様々の事を記憶居れど、皆な夢の様で朦朧ぢや、喧嘩は致したが、何故なりしやは少しも存せぬ、さるにても人間と申すは、我身の仇(酒を)を口に啣んで、性根を奪はせるやうな事を致すとは、又は喜び娛み、亂舞歡呼の其中に、何時か畜生同様に成下るとは、さて、神も恨めし

イア 乍去只今は全く御酒も醒めた御様子、餘りお早いやうてムりますな

カッ 憤怒の悪魔が來ると其儘醉狂の悪魔は大満足て何處へやら、さるにても一非去て一非來る、此身にほどく愛想が盡き申した

イア それは餘りお堅過ぎると申すもの、時も時場所も場所、此國の事情柄箇様な事の無かりし方望ましいは山々ながら、悔むも既に後の祭、此上はたゞ御一身の利益となるやう、精々御盡力なさるが宜い

カッ 宜しい然らば復職の儀を嘆願致すとして、さて大將の御詞に、貴様は大の飲酒家ぢや——某に九頭龍程澤山な口があらうと、何と其返辭が云はれうや、あゝ今の今迄人並の心ある男と思へば、忽ち阿呆、忽

ち又獸ぢや、世に盡程淺ましいものがあらうや、皆な魔の水が盛つてある

イア コレサく、よくさへ飲めば善い酒は善いもので、酒の御批難はそれで澤山、さて副官には、某が貴殿に對する好意の程を御信用下されますか

カッ それは既に證據さへ見えたる事實、某は泥醉致して居つたに——  
イア それは貴殿に限らず生きて居る人間なら、誰しも時には泥醉れることもムります、某が一計をお授け申さうなら、大將殿の其又大將は、デスデモナ殿でムりませう、何故と申せば、今の大將の有様は、彼の夫人の才識やら、美貌やらに、凡て御心をお注ぎなされて、浮の空で居られます故——事情をとくと夫人にお打明なされて、よい様にお頼み

なされずりや屹度御復職の叶ふやうに御盡力下さらう、寛大で親切で、誠に好い氣性の婦人、人の願を十二分に叶へて遣らぬば、義理が立たぬと思ふ程で居らるゝに、その良人と貴殿との中の切れた綱を繼合せてとの事でムれば、御頼みが叶ふばかりか、雨降つて地固まり、以前にまさる御仲とならせらるゝは御請合申しまする

カッ いかにも御忠告尤ぢや

イア 是はたゞ某が貴殿に對する尊敬と忠信との熱誠から、お勧め申すのでムります

カッ イヤ心から忝ない、さて然らば明日は早朝デスデモナ殿に對面致し、とくと頼み聞ゆると致さう、それも叶はなんたら、某は最早破れかぶれぢや

イア それでござく、さらば御寝みなされませ、某は是から警固てムる

カッ 左らば、イアコー殿

とカツシオ退場

イア (語) さて乃公が悪黨を働くと、は何處の何奴の目に見える、今の忠告は、心から出た正直の考、誰の胸にも臆らしく、そして眞實ムールの機嫌を取直す一法ぢや、萬物を造成する地水火風程深いは、デスデモナ、其女に心からの嘆願をして、叶へて貰うは造作もない事、彼女の身になれば、オセロを動かすは自由自在、宗旨替ても法衣替ても勝手氣儘、兎に角オセロが精神は、女房の愛で金縛り、何事も女房の心のまゝにぐなりしやなり、デスデモナの思ふ所欲する所は、即ち彼に取ての神意神託、然らばカツシオ奴に、デスデモナを頼めと勧めた乃公は、ど

れ何處が悪黨だ、へん是が即ち悪魔の極意、大悪業を人間界に播かむ  
ず初めは、神様めかした、有難がらせが先づ肝腎、乃公が仕事は丁度そ  
れ、彼の馬鹿正直奴がデスデモナに泣き付いて、其デスデモナが一心  
に、ムールへ辯解の其最中に、ムールが耳朶へ毒藥の一滴、デスデモナ  
がカッシオを留めむとは、己が肉慾の渴を癒さむ爲めと句はせて、辯  
解の數が重なる程、嫌疑も重なるやうに加減する、即ちデスデの貞操  
を不貞に使つて、その善行で罾を作り、彼奴等を一時に陥れるとは、何  
と何と甘いものか

ロデリゴー登場

ヤア是はロデリゴー

ロデ 遠くから吠える計りて、狩場の獲物は、我手に懸くこともならぬ

哀れの此身金は、大抵遣つて了う、今日も今日とて、えら酷い棒に當て  
られたが、結局犬骨で、苦い經驗を嘗めた計り、一文なしの元の空阿彌  
で、又ぞろエニスへ歸國が結着であらう

イア さて、辛抱の足らぬ者程、情ない者はない、一夜で癒る傷が何處  
にある、魔術でもない人間の知慧で、する仕事は、さう急々に仕上がる  
もので、先づ是迄は巧く往つたと申すもの、足下がカッシオに打たれた  
爲め、少々傷を受けられたが、見事カッシオは放逐の身となつた、兎も角  
も段々思ふ盡へ入って行く故、先づ一満足するがよい、イヤ最早夜も  
白白面白かったり忙しかったり、それで時がいから短かい、先づ一宿所  
へ引取るが宜しからう、様子は段々、後から御報知申す、はて御歸りや  
れと申すに

と是にてロテリョー退場

さて乃公の爲すべき仕事は二通り——先づ女房に命令して、デスデモ  
ナにカツシオの頼みを聴いてやるやうにと勧めさせ、其中拙者は、あ  
のムールを遠くの方へ引張出し、丁度カツシオがデスデモナの前へ  
出て、叩頭依頼して居る處へ連れて戻つて其光景を見せてやる、お、  
さうぢや、善は急げ此上は少しも早う

と退場

### 第三幕

#### 第一場——サイブラス 城砦前

カツシオ及び樂人共登場

カツ コレ〜 太夫達一曲頼む謝禮はしっかり致さう程に、何ぞ短い曲を、  
そして、お早うムる大將殿と定文句を附けて呉りやれ

と樂人樂を奏する

(新婦の翌朝音楽を奏して新夫婦の眼を驚かす音あり、オセロ尖  
妻は事實昨夜が新婚なれば、カツシオ樂人に向ひ右の白ありしと  
べ知る)

城内に召使はる、道化(我邦の茶坊主)登場

道化 コレ〜 太夫達、其樂器は、チーブルス仕込か、音色がいかう鼻にか

かる(花柳病は初めチーブルスに發生しチーブルス)  
は花柳病の本元從て鼻腐聲の本元故此語あり

甲樂人 何を仰有りますや

道 それはさうと太夫達、サア謝禮を進めます、そして大將殿は御前方の  
その音楽がお氣に入つて入りぬいて、最早何卒止めにして欲しいと  
の御意ぢや

樂甲 左様ならば止ませう

道 尤も耳に聞えぬ樂器があるなら、もつと聞きたいと仰せらるゝ乍去人  
の噓に大將殿は、元來音楽は餘りお好きなさらぬと申すことぢや

樂 我々共も左様な樂器は持合せませぬ

道 そんならその笛共を早く袋へ納めるがよい、早々往んで貰ひませう、  
あさらばさらば、西の海へサラリ

と樂人共退場

カツ もしく是は輕少ながら納めて呉りやれ(主と金貨を茶坊)アノ大將  
の夫人にお附の婦人(妻イェヨリア)が最早お眼覺なら、カツシオと申す  
者が、一寸面暗を得たいとお話し申して呉りやれ、どうぢや承知か  
道 彼の御婦人ならお目覺てムります、若し此方の方へ御出になつたら、そ  
のやうにお話し申す都合に致しませう

カイ 何卒さうして呉りやれ

と道化退場

イアゴー登場

これは宜い處へイアゴー殿

イア さてはとうくお寝みなさらぬな

カツ いかにもとらう、足下と別れた時最早既に夜明てムつた時にイ  
アゴ殿ちと憚てムるが、只今御内君に面會を求めた處と申すは内  
君に御依頼して、デスデモナ殿へ近づく便を得たい爲め

イア 然らば早速妻を御目に懸らせませう、そして何か方を設けて、ム  
ル殿を引張出し、その御不在中に御遠慮なくお話をなさるやうに計  
らひませう

カツ それは重々忝ない(ト退場)イヤ拙者が同郷の者などには、彼様に  
親切な正直者は一人もない

エミリア登場

エミ これは、副官様、大將の御不興、御氣の毒でなりました、乍去今に  
御歸參は叶ひませう、大將と夫人と御噂なされて、ムりますが、夫人

には貴郎の御肩をいかう御持ちなされます、大將の御返辭には、貴郎  
が御打ちなされた彼の仁(トモ)こそ、サイブラスで評判な、そして縁故  
の深いお人なり、大事を取つて考へれば、貴郎の御不興は免れぬ所、去  
りながら大將も御寵愛の貴郎故、他人からの頼みはなくとも、安全な  
機會を見次第、のがさず貴郎の御歸參をお計らひなさる思召との事  
でムります

カツ それはさうでもあらうけれど、叶ふ事なら、デスデモナ殿に内密の  
御面晤を、暫しなりとも得らるるやうに、何卒御取持ちを願ひたい

エミ そんなら此方へ御出なされませ、奥底なく御心を御打明なされる  
所へ、御案内申しませう

カツ それは千萬忝ない

と二人退場

第二場 城中の一室

オセロ、イアゴ、及び紳士若干登場

オセロ イアゴ、此書面を船頭に手渡し致せ、さらば船頭より元老院へ傳達致すであらう、それが済んだら、拙者は城砦を散歩致して居る程に、後から参るがよい

イアゴ 畏まりました、左様致すてムりませう

オセロ 然らば方々城砦を一巡致しませうか

紳士 御案内申上るてムりませう

と一同退場

第三場 城門前

デス、テモナ、カツシオ及びエミリア登場

デス 御安心なされませ、カツシオ様、及ばずながら精々骨を折りませう

エミリア 何卒さうしてお進げなされませ、イアゴなどは、自分の事でもあ

るやうに、萎れ返つて居ります

デス お、ほんに彼は實直な男ぢやない、カツシオ様、御心配なされませ

すな、良人と貴郎との其仲は、此妾が屹度故に返してお目に懸けます

カツシオ 忝ならムります、夫人、ミカエル、カツシオはどうならうと、其御親切

は決して忘れは致しませぬ

デス 其御志は忝ない、豫て大將とお仲の善い、又永年の御知己なる貴郎



の事、政略の上からは兎も角、さもなくば貴郎を決して疎略には致させませぬ

カツ 去りながら夫人、その政略といふも長く續くか、はかない事情にま  
つわらるゝか、時と場合で政略の源が増すやも知れず、其間中某が役  
目は他人の者となり居らば、大將には某が身の上などはお忘れはな  
さるまいかと、それが案じられてなりませぬ

テス 其様な御心配は御無用になされませ、エミリアは證人、貴郎の御役  
目は此妾が請合ひました、一旦かうと御引受申す上は、貫かすには止  
めぬ此身、良人には息もつがせず、夜の目も合はさせず、堪へ切れぬ程  
責め立て、睡眠の間も食事の間も、お嘆願の舌を休めず、何を爲さる  
お暇にも、カツシオ様の御詫を云立てませう、それ故ちと榮々しうな

されませ、貴郎の御依頼を、其まゝ反故に致さうより、死んだがましと  
思ふ此身

オセロ、イアゴー 彼方の隔りたる處へ登場

エミ 夫人、大將が御歸り遊ばしました

カツ 然らば夫人、某は御暇に致しまする

テス ハテ此處に御在なされて、様子を御覽なさりませ

カツ どうも只今は、何とやら氣が落つかず、心も進みませねば

テス それならよいやうになされませ

とカツ退場

イア おゝ好かぬ

オセ 何と申す

イア 何でもムりませぬ、アノたゞ——イヤ何と申して宜しいやら

オセ 只今愚妻と別れて往ったはカッシオではないか

イア 何と仰せられます、カッシオでは——いや、カッシオではムり  
ますまい、閣下の御出を見ると其まゝ、罪ある者でもあるやうに忍び  
去つたはたしかに癖者

オセ いやカッシオに相違ない

デス もうし我君、アノ妾は只今或者の嘆願を聞いて居りましたが、其者  
は貴郎の御不興受け、萎れ返りて居ります

オセ それは誰の事ぢや

デス 誰あらう副官のカッシオ、不束な妾の申し事でも、御聴取下さるな  
ら、何卒同人の詫を御ゆるしなされて下さりませ、彼のカッシオこそ

正眞の主思ひ、過失とても知つての上の事ではなし、皆々知らずに致し

たこと、若し妾の申す事が違ひましたら、此身は人の顔を見て、善悪の  
判断もつかぬ愚な者でムりませう、どうぞ御呼返し下さりまし

オセ 今出て往ったは彼であつたか

デス 左様でムります、沈み返つた其様子、後まで眼先にちらついて、此身迄  
悲しいやうな、どうぞ御呼返し下さりませ

オセ イヤ今はならぬ、何れ其中

デス 御近い中でムりますか

オセ 汝にめんじて可成早う

デス 今夜晩餐の折では

オセ いや今夜と申す譯には

デス そんなら明日晝餐の折に

オセ 明日の晝餐は外で認むる筈、城内にて士官共と會食の約ある故

ステ そんならどうぞ明日の晩さもなくば火曜の朝か、晝か、晩か、又は水曜の朝なりと何時と仰有て下さりまし、たゞ此三日の中にどうぞお赦しなされませ、眞實後悔致した様子、それに其落度と申すも普通の考ては——陣中にてはいかな良將も掟に照して、一軍の懲戒に致すとやら、それは兎も角——破門絶交と申す程の落度とも思はれませぬ、ほんに何時御呼戻し遊ばします、御申聞け下さりまし、妾ならば、貴郎の仰せらるゝ程の事、何を御否み申ませう、躊躇ふ程の事さへ致さぬ覺悟でムりますには、ミカエル、カツシオと申せば、そもやそも貴郎が御出來の御供を致して、度々館へも參られ、其時妾が、貴郎の御

噂を申上ぐれば、何や彼やと種々の辯護をなされた人、その復職を願ふのに、これ程骨を折らうとは——不束ながら此身なら——

オセ もう止せ、何時でも勝手な時に還すがよい、汝のいふ事を何拒まう

デス これは品物を御ねだれ申すのとは違ひます、どうぞ御手套を御召し下され、滋養物を御食がり下され、冷えぬ様に、暖かい御衣服をお召し下され、さては何でも御身体の御利益になる様に、遊ばして下されと申上ると同じ事——ハテ貴郎の御愛情を試して見やうなど、思ふなら、それこそ此様な事ではなく、何ぞ容易ならぬ一大事で、滅多に御聞濟はならぬ様な事を願ひませうに

オセ 汝の申す事に否やは申さぬ拙者、それ故何卒拙者が依頼をも聴い

て、暫時彼方へ往つて呉りやれ

アス 御依頼とあらば、何しに否と申しませう、左様ならば且那樣

オセ さらばデスデモナ、後から直に參るぞ

アス サア、エミリア、其方の思ふやうにどうともしや、其方のいふなりに任せる此身

とアスデモナ及びエミリア退場

オセ え、悪い程可愛い奴、たとひ我が魂魄は地獄へ墮つとも、汝は可愛い懐かしい汝可愛い思ひが失せたら、此身の胸は暗闇ぢや

イア モシ閣下――

オセ 何ぢやイアゴ

イア ミカエル、カッシオには、閣下と夫人との御仲を、豫て承知てムリま

したか

オセ いかにも、事の始終を承知の筈――何故汝はそのやうな事を

イア いやなに少と心に懸ることがムリます故、そを晴らさう爲めに伺つただけで、深い意味はムリませぬ

オセ 汝の心に懸ることゝは、コレ、イアゴ

イア 某は彼の男が、夫人を御存じとは、思ひも懸けぬ事てムりました

オセ 我等二人が中に立ち、度々橋渡しをさへ致した男

イア ハテ眞實そのやうな事が

オセ 何眞實、いかにも眞實の事ぢやが、それにつき何ぞ思當る事でもあると申すか、何とカッシオは正直な男であらうが

イア 何正直な――閣下

オセ 何正直な——いかにも正直な

イア 閣下某の承知致す所では、げに正直者でムりますな

オセ 汝は何を心に懸け居るぞ

イア 何を心に——閣下

オセ 「何を心に——閣下——拙者の口真似を致し居る、何ぞ心の中に云ふを憚る、恐ろしの大事があると見える——意味有氣な汝の素振、遂今の程、出行くカツシオを見送つて、お、好かぬとは何が好かぬ、又妻を迎ふる始終の様子を、承知致せしと告ぐるを聞き、眞實そのやうな事が」と頓興な聲を出し、眉根に皺を寄せた様子、或る恐ろしの感念を胸に閉籠め置くと見た、汝若し拙者を思ふの心あらば、包まずその胸中を語つて聞かせよ

イア 君を思ふ某が誠忠は、閣下も御承知

オセ いかにもその誠忠はあるであらう、そして拙者の存する所では、萬に情深く忠實で、熟と考へた上ならては、一言一句も吐かぬ、汝、それ故汝が此様に詞を中斷するは不審でならぬ、虚偽の多い者には、かゝる思はせぶりもある習ひながら、正直者が箇様な事を致すには、何ぞ心の奥から溢れ出て、せき留兼て、遂口の端に表れたものであらう

イア ミカエル、カツシオ儀に就きましては、誓てたゞ正直一遍の男とのみ、某は思つて居ります

オセ 拙者とても其通り

イア 人は見懸通りに致したいもの、若し不正直な者がムりましたら、正直らしい面付は致させたくもムりませぬ

オセ 實に、人は見懸通りに致したい

イア ハテ然らばカッシオは、正直者でムリませう

オセ イヤどうもこれには深い意味があらう、何卒ぢや、汝の考を有の儘に語つて聞かせい、そして無遠慮な推察を無遠慮な詞で云うて見や

イア 閣下それは御免下されませ、義務ならば如何なる義務をも辭退は致さねど、奴隷でさへも許さるゝ思想の自由を抛つて、心の中を白狀せいと、そりや御言葉とも存じませぬ、ハテ思想と申すは汚い卑しいものでムリます、どんな結構な宮殿でも、時には穢いものも立入る習ひ、如何な生無垢な胸の中でも、さもしい考が隅の方に、立派な考と袖を連ねて、ちんと濟まして居るもので御座ります

オセ コレ、イア、ゴ、汝は親友たる拙者をば、態々苦むると申すものぢや

拙者が汝の詞故に、此通り煩悶致すを見て、心に秘めたる一伍一什を語つて聞かさぬとは聞えぬぞや

イア 何卒それは——イヤ某の推察は大方間違つて居りませう、取留もない事に要らざる詮索を致すが某の癖、それに嫉妬といふものが、有りもせぬ罪科を勝手に作ることもムリますれば——箇様に當てにならぬ想像を致す某如き者の、ふと云棄てたはかない詞などは、何卒御氣に懸けられず、我から御懸念をお作りなさるやうな事は遊ばしませぬ、某が心中の疑惑を御話し申すは、閣下御安心の種にもあらねば、何の御役にも立つ事ではムリませぬ、又某とても正直な知慮ある一男兒として、左様な御話は致したうもムリませぬ

オセ ハテ解し兼ねる汝が詞

イア 令名と申すは男女を問はず、生命から二番目の寶物でムります、財布の金は盗まれても、それは惜むにも足らぬ物、どうて我有たりとも人の有にもなればなり、幾千人の有てもあつた物、乍去一度令名を盗まれたら、生涯取還す見込はない、ぢやと申して盗みし者を富ますものでもムりませぬ

オセ 愈よ汝が心中の秘密を、發見ぬ中は、承知がならぬ

イア イヤ某が心を抜き取て、閣下の御掌の上に捧ぐればとて、どうして秘密が御眼に留まらう、まして某が胸の中にある上は、逆もくくてもムります

オセ 何と

イア お、閣下、御嫉妬を御用心なされませ、嫉妬と申すは眼玉の青い怪

物で、取て食ふ犠牲を、先づ扱弄するものでムります、不貞の妻に泥を塗られたと承知しても、其妻を愛せぬ男は、まだ仕合せてムりますが、可愛い女房に嫌疑を懸け、其貞節を怪みながらも、尙ほ可愛うてならぬ男は、お、何たる因果な月日を送ることでもムりませう

オセ お、その因果さは

イア 貧なれども足ることを知るものは、畢竟富者に異ならず、富めども安んずるなき者には、無限の富も何にかはせむ、昊天願くば我等人間の心中より、嫉妬の炎を消させ給へ

オセ 何故そのやうな事を申すぞ、月の表面の變る様に、日々新たなる嫌疑を起して、嫉妬の生涯を送る拙者と思ふか、否、一度疑惑を起す上は、虚實は一舉にして決せんのみ、汝の推測する様な、取留もない愚かし

い臆説に、心を傾くる様な事があつたら、此身は獸類に墜おとされう、拙者が妻は美しうて、能く飲み能く食ひ、客を好み、談話を好み、能く弾き能く唄ひ、能く躍るなど、聞いたとて、それで嫉妬は起すまい、節操さへあるならば、是も結句女の裝飾かざり又は連れ添ふ此身が醜みにくいとて、妻に疑心などは少ちとも懸けぬ、ハテ眼まなこあつて拙者を撰みしならずや、否々イヤゴ、拙者は目に觸れぬ事は疑はぬ、疑ひし上は實否を糺たださにや措かぬ、糺した上は愛を棄るか嫌疑を棄るか、二者其一を撰ぶぢやまで

イア それ承つて某も大に安堵、今は奥底おくぞこなく某が誠忠を、閣下に捧るを得るといふもの、さらばいざ誠忠より出づる某が苦言を御聞下され、證據と申してはまだムリませぬ、夫人に御注意遊ばしませ、カシッオとの御仲に御目を留められませ、乍去嫉妬がましい御様子、又はわさ

とらしい無頓着もようはムリませぬ、某は閣下の寛大な御性質に附込んで、不義を働く者あるが憎うて堪へられませぬ、御用心なされませ、我國人の性質は某よく承知致しますが、ゴニス婦人は、夫に知らされぬ淫行いんぎやうを致すが常とは天知る地知る、左様な舉動きやうどうは慎まうとは思ひもせず、いかにもして秘し隠さうが、彼等が道念の頂上てムリませ

オセ ハテそれ程迄とは

イア 夫人とても生みの父御を欺いて、閣下に御奔りなされました、閣下の御顔貌おんかほを恐るゝ様に見せ懸けながら、其實慕うて御在おんなされました

オセ 實まことに其通り

イア 其通りてムリますもの——彼のやうに御若いに、父御の眼をさへ



眩まして魔術とまで思はせる様な御手際——イヤ申譯もムリませぬ、是も畢竟閣下を思ふ真心が過ての上と、何卒御容赦下さりませ

オセ 汝の志は一生忘れぬ

イア どうやら少々御心を騒がせ申しましたやうてムリますな

オセ いや少しもく

イア どうもお騒がせ申したやうて——只今申上し事は全く某の誠から出たる事と覺召し下されませ、イヤどうもたゞとも思はれぬ御様子——情願でムリます、某の申條は、たゞ全くの嫌疑に過ぎませねば、それを御心で推し擴げて、たしかな事實ぢやなど、御推測下されませぬ

オセ 左様な事は致さぬ

イア 左様な事をなされたなら、御爲を思つて申し、詞が思ひも寄りぬ結果となります、カツシオは某が良友でもあり——閣下、どうも御激動なされた御様子

オセ いや左程激動も致さぬが、あのデスデモッに不貞な行爲があらうとは、どうも拙者には合點が参らぬ

イア いつくまでもどうぞ夫人はその通りで、閣下の御考も、其通りであらむ事を祈る計りてムリます

オセ とは云ひながら、如何なれば自然の人情に背き——

イア 實にく其處でムリます——憚らず申上げますれば——國を同じうし、肌膚を同じうし、階級を同じうする所に靡き従ふは、人情の自然でムリますに、それ等に御目も呉れぬとは——お、かゝる行爲の

裡には油断のならぬ下心、さもししい心根、不相應な悪企などの潜めるもの、乍去御容赦下され、是は夫人の御一身をのみ申すのではムリませぬ、たゞ某の恐るゝ所は、何時か又自然の人情に御立戻りなされて、乍恐閣下の御身を自國の殿原と御比べなされ、動もすれば御後悔遊ばすやうな事がありませぬかとの一條でムリます

オセ 此上とも認めたる事があつたら、報告して呉りやれ、そして汝が女房を隠目附に致して置け、今日はこれで別れると致さう、おさらば

イア (行ながら) 然らば閣下も暇を致しまする

オセ 口悔しい此結婚——一定彼の正直者奴、今申した事などより、もっともこと見知れる事があるであらう

イア (又戻り) 閣下、何卒此事は此上御糺明遊ばされぬやうに、偏に願上ま

する、暫く打棄置いて様子を御覽なされませ、カッソオ復職の儀は誠に結構、あのやうによく副官の役目を勤むる者はムリますまい、乍去尙ほ暫らくの間、彼を御遠ざけ置遊ばさるれば、如何なる舉動を致すか様子は尤も能く判る事でムリませう、夫人には如何程まで御執心に彼が復職を御迫りなさるか、それ等を御覽あつても御合點の参らるゝ事がムリませう、たゞ差當りては某が要らざる心配故に、圖らず御節介を申上げ、御騒がせ申せし段、悪しからず思召下されませ、そして御情願でムリます、何卒夫人は御寛大に——

オセ 心配致すな、短慮な舉動は致さぬ拙者

イア 然らば又御暇に致しまする

とイヤ退場

オセ 思へば彼奴は類希なる正直者、そして人間行動の大綱に精通致し居る——さはれ手伺の態に手を噛まれたなら、脚につけたる革紐は、よし飼主が玉の緒なりとも、風のまに／＼、行術も知らず放ち遣り、運命の餌食をあさらせむ、此身は黒人、大宮人の雅びたる聲作は思ひも寄らず、さては年齢さへさだ過ぎしを厭うてか——もとより老朽らしといふにもあらねど——妻は此身を見棄てし様子、而に泥を塗られし此身、此上は妻憎しと思ふ念を起し得ば、それぞ唯一の慰藉なるべけれ、おゝ厭ふべきは結婚、彼の美し者を我者と呼びながらも、其情慾の放縱を制へることの出来ぬとは——愛する女の情の片隅を我有にして、他人のなぐさみに供へうより、寧ろ岩窟の中の陰濕い空気を吸ふ、蟻蝶と果てるが幸福、下賤の者にてもあらば、心ゆく舉動も致

さるれど、身分ある身の悲しさは、左程の事も致されず、思へばこれも道れぬ宿命、生あれば死あるが如く、母の胎内に宿りし時より、身に定まれる因果であらう、や、彼女が参りし様子

デス ジェゼナ、エミリア登場

彼の顔で醜い行爲のあらうとは、造化の神の悪戯か、否々、拙者はどうあつても、左様の事は信ぜぬ覺悟

デス 如何遊ばしました我が君、晝餐の準備も出来、それに御招待なされました、此島の歴々方、貴方の御來席を御待申して居りますに

オセ あゝ、これは拙者が疎漏であつた

デス どうやら御聲の顔ひまするは——御氣色の勝れぬのでは——  
オセ 前額に痛みを覺ゆる故

アス それも御道理、夜前は碌々、御眠りもなさりませぬ、直ぐにお癒り遊ばしませう、ちや、とこれにて御鉢巻を——今の間に御快くおなりなされます

オセ イヤ、其手巾では小さ過ぎる、打棄て置きやれ(とアス、オセに鉢巻を手に落し心付かず)、どれ、一緒に参らう

とオセ、アス退場

エミ 嬉しやこれ爰に、御手巾が落ちて居た、これはムール殿から、夫人へ初めての贈品、あの放縦な良人が、是を密と盗んでと、五月蠅程の御ねだれなれど、ムール殿から肌身離さず持て居やとの御詞故、夫人にはそれは、接吻したり物云懸たり、大切に持て御在の品、お、妾は先づ此刺繡の文様を取って、そして、イアゴー殿に渡して進げやう、これ

て、何をする事やら、それは少しも知らぬけれど、喜ぶ顔を見るも一

興

イアゴー登場

イア コレ、獨りて何を致して居やる

エミ そのやうにがみ、いはぬもの、貴郎に進げるものがあるわいな

イア 乃公に呉れるものが——乃公に計りぢやない、誰にても——

エミ 何と

イア いや、誰でも、頼間な女房を持つは詰らぬものぢや

エミ お、それだけで——そんならあの手巾の御禮には、貴郎は何を下

さりませす

イア 手巾とは何の手巾

エミ 何の手巾、ハテ、ムール殿から、デスデモナ様へ初めての御贈物、アノ  
貴郎が密と奪てと度々話のあった品

イア そんなら首尾克く盗み取ったか

エミ 何のいな、夫人が遂鳥渡お落しなされたを、幸と妾がこゝに居合せ  
て、圖らず拾ひ取ったのぢやわいな、これ之を見なされや

イア 好い娘ぢや、此處へ遣せ

エミ 盗て呉れいとあのやうに、いかう執心なされたが、これて何を爲さ  
るのぢやえ

イア (奪取り)それ聞いて何にする

エミ さしたる入用もないならば、此方へ戻して下さりませ、おかわいさ  
うに夫人は、お失しなされたとお氣がついたら、狂氣の様にかなりな

さらう

イア 拾うたなど、云うてはないぞ、乃公にはちと用途がある程に――  
もう用はない彼方へ往きやれ

とエミリア退場

うまい、此手巾を、カツシオが宿へ落して置いて、さて彼奴に拾は  
せう、どのやうに詰らぬ物でも、嫉妬の目にはお經の文句程確かな證  
據に見ゆるもの、これも何ぞの役に立たう、光刻吹込んだ乃公の毒で、  
ムールは既に色を變へた、嫉妬といふも元來毒藥最初は苦い物でも  
ないが、一度血潮に交つたなら、硫黄の坑と焼えひろがるは目前――  
證據は眼前、彼方から來るアレ彼の姿を見れば判明る

オセロ登場

あなあはれ、世界中の魔睡薬も、今日は昨日の安眠を、最早與ふることではない

オセ (語) さて、此拙者に泥を塗るとは

イア 申し大將閣下、最早其事は御心に懸けられますな

オセ ヤイ、退れ、拙者を此苦境に墜した奴、知らずもあらば如何な耻辱を受くるとも、生中知るには優るべきに

イア 如何なされました閣下

オセ 彼女奴が不義の快樂を貪るなど、は思ひもつかず、眼にも見ず、夢にも見ねば、不快を覺ゆることもなく、其事ありし後とても、嬉しく樂しき俱寢の床、カッショオが接吻の痕を、彼女が唇に認めもせなんだ、盗まれしとて何一つ失せる物でもなき上は、盗まれたと知らずもあら

ば、結句盜難の苦は知るまい

イア 左様な御詞を承る此身の苦しさ

オセ 我が全軍の將卒擧て、名もなき雜兵の末迄が彼女が身軀を嘗め廻はさうと、知らずに居たらば、此苦みはよもあるまい、心の平和も今は是迄、満足も安心も既やあさらば、兜の星を閃かす千軍萬馬、功名の争ひを善事と勵む、野戰攻城も昨日の夢馬の嘶き喇叭の響き、心も勇む太鼓の音、耳を貫く笛の聲、錦の御旗や何やかや、威武堂々の軍裝束、さては雷神の雄叫びを、其身に摸す大砲小砲、それもこれもこれが訣別、オセロの役目も既や是迄

イア それ程迄に、閣下

オセ ヤイ、汝は、我愛しの者を淫婦と呼びしな、然らば眼に見ゆる證

據を見せよ、それが成らざれば、犬猫と生れても、拙者が怒りに逢はなん  
だらと、後に口悔しく思ふてあらう

イア これ程までにおなり遊ばしましたか

オセ いざ、證據を見するか、さなくば委細を語りて、一點の疑を容れ  
ざる迄に證明を立てよ、それも成らざれば命はないぞ

イア 申し閣下――

オセ 汝若し故なきに、彼女を誹り、妄りに拙者を苦むるならば、それぞ此  
上もなき大悪業、今より汝神に背き、道を棄て、悪を積み、天も泣き地も  
顔なく程の非道を爲すとも、之に増す神罰はよも受けまい

イア お、救はせ給へ、天も御加護あらせ給へ――閣下、それでも大丈夫  
の御身でゐるか、それでも精神といふもの、思慮といふものを有たせ

給ふか、神明の御加護を御願ひなされませい、某が好意を御容れなさ  
れませい――お、さるにても此身の愚かさ、正直故に罪を得るとは、  
さて、世の中は奇怪千萬、お、浮世の人々、御用心あれ、露骨に正直  
なは安全の道ではない――難有うムります、かう悟りましたも閣下  
故、以後は又と人の爲を圖る事は致しませまい、かやうな恨みを買ひ  
まするも、畢竟餘りに人の爲を思ふ故(と行かん)

オセ いや待て、汝は矢張り正直が宜い

イア いや某は、も少し狡猾に致すが宜うムります、正直は即ち恐直、勞し  
て功を收むることは出来ませぬ

オセ え、我が妻を正しと思へど、左あらぬやうにも思はれ、又汝を正し  
と思へど、同じく左あらぬやうにも思はれて、こりや何ぞ證據がなく

ては、婦娥(貞節の守護神)の面の其様に清淨無垢なりし彼女が名も今は汚れて黒々と宛ら我顔を見るやうな、えゝ其處らに繩はないか、劍はないか、毒も薬もない事か、彼女を投込む火水はないか、若しあつたら我慢がならぬ——ちえゝ無念、證據を見て満足が致したい

イア 憤怒の餌食と御身を御任せなされましたな、それも畢竟某故と、後悔致せど詮もない——何と、證據が見たいと仰有りますか

オセ 何見たい——いや見ねば承知がならぬ

イア その御望みは叶ひませう、乍去、どうして御満足なされます、閣下、上官の閣下が指を銜へて惘然と——夫人の他人に奪らるゝ所を

オセ おゝ、死んで奈落へ墜つるとも、そのやうな事となるべきや

イア げに其様な光景を、御覽に入れるは一大難事でムりませう、常人同

士の眼の外に見るべきものではムりませぬ、果して然らば何とてムります、ハテ何と申してよいやら、これでどうして御満足が得られませう、縦令彼の御二方がさかりの附いた獣の様であらうとも、閣下の御覽に入れることは思ひも寄らず——乍去、只だ事の真相を手間探る緒ともなるやうな、事實談で御満足なされうなら、御話し申すは易い事でムります

オセ おゝ、然らば彼女が不貞なりてふ、生きた事實を語って聞かせよ

イア 面目もない役目ながら、人様の御爲を思ふ愚直故に、こゝ迄乗りかかった舟でムれば、寧ろお話し申ませう、遂此程の事、某はカッショオと供寢を致しましたが、烈しき齒痛に悩まされ、終夜とら／＼夢をも結びませなんだ、世には精神にまだらがなく、睡眠の中に己が秘密を口走



る者がムリですが、カッシオも其一人と見え、いつしか譫言にいふを聞けば「コレいとしのデスデモナ、用心が専一く、二人の仲を悟られぬやうに——」さて某の手をぐつと引いて握りしめ、「あゝ可愛い奴」と口を寄せ、接吻といふものが某の唇に生て居るを、根ごきにでもするやうな荒々しさやがて腿の上に脚をのせかけ、溜息吐いたり口を寄せたり、舉句の果が「このやうに可愛い奴を、何の因果でムールの持物」

オセ 奇怪千萬

イア いや、これはたゞ彼が一夢に過ぎませぬ

オセ 即ち前以て、左様な實事もありしことを示すもの、夢に過ぎねど嫌疑の廉は至て深いわ

イア げに仰有れば、薄弱な他の證據に、力を添ふる一助とも成りまする

オセ 八裂にしても飽足らぬ女

イア いやく左様な御短慮はなりませぬ、まだ實事を認めただではムリませねば、至て操正しく居らせらるゝやも測られませぬ、只だ一つ伺ひまするは、閣下には夫人が、草莓の刺繡のある御手巾を御持ちなされるを、御覽なされた事はムリませぬか

オセ 其手巾こそは拙者より妻へ初めての贈物

イア その事は存じませぬが、夫人の御持ちなされたに相違のない、右様の手巾にて、今日カッシオが髯を拭うて居りまするを見届けましてムリます

イア 果してそれがそれならば

イア それであらうと、これであらうと、夫人の御所有品である上は、これ

も證據の數の中でムリませう

オセ お、カツシオ奴の命の數が千も萬もあればよい、たつた一つを奪ただけでは此恨みは晴されぬ、今は何疑のあるべき、二人が不義は事實であらう、これ見よ、イアゴ、愛も戀も、今はおさらば、天に向つて棄てたぞよ、此上はお、汝復讐の惡魔、地獄の窟を早や出てよ、戀童子は汝が冠と胸奥の玉座とを、暴逆無道の「嫌惡」に譲れ、毒蛇の舌を包めや、我胸

イア 先づ、御心を鎮めなされ

オセ チエ、復讐の血を見るまでは

イア 御心を鎮めなされませ、時經つ中には又御考も變りませう

オセ 決して、變りは致さぬ、傳へ聞く彼の黒海の冷き潮は、留度もなく進み、て、プロボンチス、ヘレスポントへ注ぎ入り、未だ嘗て一度

も逆流したることなしとか、我復讐の念も其通り、急潮後を顧るの暇もなく、流れ、て殺戮の血の大海に、合さる迄は、退潮もせじ、愛の磯邊へ寄せはせじ、昊天もみそなはせ、諸天諸神を證人にして、某は茲に復讐の事を誓ひます

と腕きて誓を立つる

イア イヤ暫く、其儘に、某も御一緒に誓ひまする——天に在す日月星辰、我等を包む地水火風もよく聞け、茲に我、イアゴ、智の有丈、愛の有丈、腕の有丈を捧げて、オセロが復讐に犬馬の勞を致さむことを誓ひまする、何事も彼が思ひのまに、如何なる殘忍の行爲たりとも、惟命惟従ふ事を拒みませぬ

と二人同時に立上る

オセ 忝ない汝の志、遠慮なう受くると致さう、さて早速汝に依頼致す一事と申すは、今より三日が中に、汝の口より既やカツシオは、此世の者ならずとの詞が聞きたい

イア 畏りました、親友ながら彼が命は、某が貰ひ受けます、閣下の御依頼故にかくの通りに致します、乍去夫人は何卒御助け遊ばしませ  
 オセ お、彼の淫婦奴も奈落の底に墜さて置かうや——イザ彼方へ参らう、拙者はこれより、何ぞ簡便の手段を以て、彼の妖婦を亡くなさむ工夫を致さう——副官の役目は今より汝に與ふるぞよ

イア 一生御恩命は忘れませぬ

と退場

第四場 城門前

デス アモナ、エミリア、道化登場

アス 副官カツシオ殿の御宿は何處か、汝は存じて居やらぬか

道化 御宿は何處ぢや、コレ此處ぢやと御告げ申せば、此私は虚言者

アス 何をいふやら譯もなし

道 はて、私は御宿を少しも存じませぬに、手製の出鱈目で、やれ此處ぢや、やれ彼處ぢやと申上げるは、眞赤な虚言家てムりませうが

アス そんなら人にも尋ね、聞糺してたもれい喩

道 然らば諸人と問答を致し、其返答に依つて御宿を聞定めまするてムりませう

アス 尋ね當てたら、こゝへ参るやうにいうてたもれ、又大將殿へは、宜きやうに取做して置きし故、萬事故に復るであらうと傳言しや

道 ハ、ハ、左様な役目ならば男兒たる者に、勤まらぬ事はよもムるまいぢやに依て御詮の趣、屹度致して見ますてムりませう

と道化退場

アス 喃エミリア、何處へ失した事ぢや、ら、ぼんに不審はあの手巾

エミ 妾も一向に存じませぬ

アス 黄金を入れた財布ぢやとて、此様に惜しうはあるまい、大將殿の御心が高尚くて、恪氣深い世の常の男のやうな、さもしい所がなければこそ、さもなくば、屹度何とかと思ひなさらう

エミ そんならアノ恪氣は御有ちなされませぬか

アス そりや誰が大將殿が——何のいな、大將殿のお生れ故郷は、大層熱い國ぢやに依て、其様な恪氣などは、蒸殺されて失せたやら、跡形もないわいな

エミ それ／＼御噂をすれば、彼處へ御いてなされました

アス 今度こそカツシオ殿を、御呼還し遊ばすまでは、お側を離れることではない

オセロ登場

これは我郎君、御機嫌は如何てムりますな

オセ 何ともない無事ぢや——(旁白)おゝ、何げなき様子を装ふ其苦し

——して其許は

アス 妾も何ともムりませぬ